14.5-118イ
1200700230691

パンフレット第八號
昭和四年四月改訂

滿蒙より何を期待すべきか

（滿蒙資源要說）

南滿洲鐵道株式會社
庶務部調査課

始

正　誤

一、七頁　六行目　人口　二九五、六五四ト
アルハ二四五、六五四ノ誤
一、三七頁　北滿東支線　括弧ノ下稜ノ上ニ
穆ヲ脱ス

本篇は大正十三年九月の版を現勢に改訂增補せるものなり素より要說なれば詳細竝に關係事項に就ては脚註せる資料を參看せられたし記載資料は專ら調査課の編述に係るものゝみに止めた

目次

總說……一

第一部　滿蒙の廣袤と人口——過去に於ける日滿關係……三

一　滿蒙とは如何なる地域をいふか……三
二　行政的區劃……四
三　滿蒙の廣袤と人口……五
四　南北滿洲の境界……七
五　過去に於ける日滿關係……九

第二部　滿蒙の資源……一二

一　農產資源—總產額及輸出可能數量……一二
二　大豆と小麥……一四
三　高粱、粟及び玉蜀黍……一六
四　滿洲米……一七
五　柞蠶……一八
六　其他農產物……一八

七　邦人の滿蒙に於ける農業經營の可能性……一九
八　滿蒙農産資源增殖の一方法……二一
九　林産資源—森林の分布……二三
一〇　供給木材の數量—パルプ原料……二六
一一　畜産資源—家畜の頭數……二八
一二　畜産製造品……二九
一三　水産資源—魚獲高……三一
一四　關東州の鹽業……三二
一五　鑛産資源—鞍山製鐵……三四
一六　石　炭……三六
一七　撫順炭—油母頁岩工業……三八
一八　滿蒙の工業生産……四〇
一九　總括—滿蒙資源の輸出現勢……四二
第三部　我國衣食住料問題と滿蒙の資源……四四
一　我國食料の需給狀態—米……四四
二　麥類の需給關係……四六
三　豆類の需給關係……四八

四　滿洲粟の朝鮮輸出……五一
五　肉類需給と滿蒙牛……五三
六　鹽の需給狀態……五五
七　建築材の需給と滿洲材……五七
八　衣服料の需給狀態—棉花と羊毛……五九
九　我が燃料問題と滿蒙……六二
一〇　總括—滿蒙資源の日本向輸出現勢……六四

滿蒙より何を期待すべきか

（滿蒙資源要説）

臨時經濟調査委員會常務幹事　野中時雄

總説

日本國は經濟上滿蒙より何を期待すべきか、土地か然り、土地の商租に依りて南滿及東部內蒙古に於ける土地利用の權を有しては居るが、其實用に於て全く空權なる事既に周知の次第、且つ其體力、生活費の點に於て特殊の智識技能竝に資力なくして單なる、彼我農民對農民、牧夫對牧夫としては到底、我租借地たる關東州內に於ても生活は至難、從つて土地に依存する移植民に多く光明を認め難い。然らば此地所產の天產資源は如何に、人、口を開けば、滿蒙の富源の有望を說くが果して然るか、現在我國食糧品米、小麥、大豆、獸肉類の農產不足高年二億八千萬圓、加ふるに工業原料たる農產品七億五千萬圓、其他を合して農產品輸入總額十二億、我國輸入總額の半額に當る不足高に對して果して幾許の供給能力が滿蒙にありや、其現在及將來を研究し、滿蒙資源の需要者日本の立場から見て各種資源の價値を明にし又開發增長の方法に就いて說明するのが本小冊子の目的である。

本篇を分つて三とする。第一部に於ては滿蒙の地理的解說、卽ち生產消費と密切の關係を有する、面積人口を擧げた。地域は廣いが人口は比較的少い。然し東三省殊に鐵道の沿線に於ては決して人口粗なりとは言へぬ。近年の山東、河北の大移民猶經續さるゝに於ては、東亞に於ける稀に見る人口稠密の我國の域に達するも遠くはない。

第二部に於ては、滿蒙資源の現狀を說いた。滿蒙の資源は、農產を第一とするが就中、大豆と小麥とは現在竝に將來に於て注目すべき產物であり雜穀は將來我國畜產業の發達に伴ひて飼料供給上忽諸に附し難い。鑛產に於ては石炭と石油、水產は鹽を有望とした。其他の產物に就いては將來の開發に俟つべきである。現在に於て、大豆、鹽、石炭は滿洲に於ける三大產物である。

第三部に於ては、我國衣、食、住料問題上滿蒙資源は如何なる貢獻をなすべきかを明にせんとした。食糧問題上米麥の供給は現在直に之を滿洲より求むる事は出來ない。然し豆と鹽とは安心してよい。肉は又餘程の資源の培養に努めねばならぬ。が靑島牛の供給に不安を感ずる現時に於ては等閑に附し難い。建築材に於ても同樣である。棉花と羊毛又多くを期待し難い。獨り近代文明を運轉しつゝある燃料問題の解決は撫順の石炭に於て意を强するに足り、油頁岩よりする油は手近の勢力圈內より製出せらるゝ點に於て有望である。鞍山の鐵も亦同意義を有するであらう。

記載の統計資料に關しては成る可く正確を期したが、滿蒙に於ける、生產統計の不備は有識者の等しく認むる處主として滿鐵調査課のものを以つて編纂せるも或は見込違ひも無しとは言へぬ。たゞ之に依つて其大勢を察せられやうと思ふ。

要するに、我滿蒙は人口、食糧問題上より見て重要視せらるべき地域である。吾が國が此地以外に於て容易に本問題を解決し得るの場所を發見し難いであらう。今にして更に確實に滿蒙の資源を把握し置くにあらざれば我國が更に經濟上の難況に立至りて後旣に遲きを惜む事なしとしない。此點に於て一般邦人の熱ある注視を我が滿蒙に集めしめ度いと思ふ。

第一部　滿蒙の廣袤と人口——過去に於ける日滿關係

一　滿蒙とは如何なる地域をいふか

滿蒙とは滿洲及蒙古の謂であること勿論であるが、滿洲なるものゝ地域としては今日明確なものがない。滿洲は漢人に對する人種上の區別をする爲めに用ゐられた名稱に過ぎない。其名稱の沿革に至つても其說種々あり、淸の大祖の尊稱を滿住と謂ひ、大宗が一六三六年に國號を大淸と改め、舊稱金國に代ふるに滿洲と稱したりとするものであるといふ。

地理的には山海關の外卽ち關外、又は、法制上東三省又は東省と稱せらるゝ卽ち遼寧(奉天)、吉林及黑龍江省の三省を以て滿洲の對稱と言ふべきである。滿洲は主として外國人が、滿洲朝發祥の地であり且つ滿人の多く住居せる地方であつたから、此地域を滿洲と稱するに至つたものゝ樣である。

蒙古も其民族の稱號を轉じて其住居の地を蒙古と稱したるらしく、唐の時代旣に蒙古の稱號があつた。從て蒙古なる地域にも幾多の變遷のあつた事は想像するに難くはない。現在の蒙古は、北緯三七度乃至五

滿蒙全書第一卷(滿鐵調査課)大正十年十月
蒙古民族自決運動(滿鐵パンフレット第二十一)大正十五年三月

〇度、東徑八五度乃至一二五度に亙る、東西二、二九六哩、南北一、〇二五哩の尨大なる地域、面積百四十八萬方哩の總稱であつて、內、外蒙古及額魯特蒙古の三地方とする。

本篇に滿蒙と稱するも其對稱とする處は、便宜上、東三省及東部內蒙古（東四盟なる哲里木、卓索圖、昭烏達、錫林郭勒）の範圍を出でない。等しく蒙古といふも、其廣漠たる地方は調査の至らざる處多く、且つ日本との經濟的關係に於てもしかく重要さを有しないからである。

二　行政的區劃

東三省に於ては、過般の易幟以來、南京國民政府の治下諸省と同樣、各省政府を置き、舊來の道を廢し省を更に縣に分ち、縣政府を置く。省政府主席委員及委員竝に縣長を置いて民政を司つて居る。委員は各廳長を兼ぬ省に於ける產業監督助長機關は農鑛廳及工商廳であり各縣には農務會商務會等の自治產業團體がある事日本の農會又は商工會議所と異る處がない。三省の省城には、農務總會、商務總會があり、農事試驗場と農學校とが設置せられて產業の振興を司つて居る。

軍政は邊防軍司令長官を東三省に置き、張學良之が司令長官であり、張作相、萬福麟は副司令である。

東三省縣治行政區劃は左の如くである

遼寧省（奉天）　五十七縣

政府主席　翟文選

外委員　十名

吉林省（吉林）　四十二縣

政府主席　張作相

外委員　十名

黑龍江省（齊々哈爾）　三十六縣

政府主席　萬福麟

外委員　十一名

特別行政區域であつた、熱河都統管區には又、熱河（主席、湯玉麟）、察哈爾（主席、徐永昌）、綏遠（主席、楊愛源）の三省が置かれて何れも省政が行はるゝ樣になつた。

中央政府は單に其主權を總攬してゐる、蒙古は各種族の自治に委せられ、世襲の酋長、札薩克又は喇嘛に總括せしめては居るが三省接壤地方より漸次、漢人種を植民せしめ、是等の地域は借地養民の名の下に開放せしめて漸次縣治を敷かしめて居る。

三　滿蒙の廣袤と人口

滿蒙に於ける面積は、我滿鐵調査課の昭和三年推算せる處は東三省六萬五千六百二十四方里、東部內蒙古一萬三千二百八方里計七萬八千八百三十二方里にして全日本面積たる四萬四千百三十八方里は東三省の約六七・二％に當つて居る。人口又正確なる統計を缺くが、筆者が大正十三年に推算せる時は東三省二千三百六十萬人なりしも昭和三年現在は二千八百三萬人にして約四百四十萬人の增加にして最近年約百萬人

の増加を見て居る。東邦内蒙古の人口に至りては四百五十萬或は五百萬と稱せらる。以上を以てすれば東三省は面積に於て我國の一倍半なるに人口は三分の一に過ぎない。

猶過去に於ける三省人口增加の趨勢を見るに一九〇二年千二百萬人、一九一二年千九百七十四萬人、一九二四年二千五百七十萬人、一九二七年二千七百四十一萬人の諸統計がある。

	面積	人口	一方里人口
遼寧省	一一、八六九方里	一四、四七六、六〇〇人	一、二一九
吉林省	一五、五八〇	八、五九二、二〇〇	五三七
黑龍江省	三七、七七五	四、九六五、六〇〇	一三一
計	六五、六二四	二八、〇三四、四〇〇	四四二
熱河都統管區	一〇、一六八	四、五〇〇、〇〇〇	四一二
三省接壤蒙古未開放地	三、〇四〇	?	—
合計	七八、八三二	三二、五四三、四〇〇	—

一方里當人口密度を見るに、遼寧省は青森縣（一、三〇二人）に當り、岩手縣よりは稠密であり吉林省は北海道（四三七人）よりも密である。黑龍江省は我府縣に比すべきものがない。總平均に於ては我北海道よりは稠密なる結果を示して居る。其人口密度に於ては黑龍江省を除いては決して必しも粗なりと言ひ得ない。況や年々北支那方面よりの植民に依つて增加しつゝある勢を以つてすれば東三省は漸次人口の抱擁力を失ふに至るであらう。

日本人の現勢を知るために南滿洲に於ける在住日本人戶口數を揭ぐれば次の如くである。

吉林省各縣の人口及耕地面積と其考察（滿鐵調査課時報第五卷第八號）大正十四年八月
奉天省居住鮮人の規則（滿鐵調査課時報第六卷第一號）昭和元年一月
滿洲鐵道發達の一考察（滿鐵調査課時報第九卷第三號）昭和四年三月

	戶數	內地人	朝鮮人	支那人	外國人	計	人口
明治四十二年三月末	一九、一八四						五七、四七八
大正二年同	二六、〇三四						八四、六七三
大正六年同	二九、五六九						一〇二、六〇五
大正十年同	四五、九二五						一八六、六六四
大正十三年十二月末	五一、四八三						二一〇、三〇〇
昭和三年同	五七、二八三						二九五、六五四
關東州		一〇〇、八八三	一、二五二	七九、八三三	四九一	八三、三五八	
滿鐵附屬地		九〇、三八〇	二、〇四五	二〇、二九一	一、七八八	三三、四七四	
領事館管內		五、二四二	三六、九七一	—	—	四二、二一四	
計		一九六、三五六	四九、二五八	九四〇、一二三	二、三五九	一、八八〇、四六	

昭和三年關東廳要覽
南滿洲鐵道株式會社會業班（滿鐵調査課）昭和三年九月

四　南北滿洲の境界

大正四年五月二十五日の日支條約第二條、第三條等に南滿洲及東部內蒙古なる地を以て各種の商工業上の建物を建設し又農業を經營する爲めに必要なる土地の商租の權利及住居往來を認められて居るが、元來支那側には南滿洲及東部內蒙古なる地域の名稱がなく、該條約の適用範圍に就ても尙研究の餘地がある。

吾等通俗に南滿といひ、北滿といふも從て其範圍に關して確然たる者があるのではない。言ふ者も聞く

者も漠然たるのみ、其解釋の區々たる者がある。今其主なる者を擧ぐれば次の如くである。

（一）省の境界に依つて區分せんとするもの

（イ）北滿……黑龍江省（面積三七、七七五方里）
　　南滿……遼寧、吉林省（同二七、八四九方里）

（ロ）北滿……吉林、黑龍江省（同五三、七五五方里）
　　南滿……遼寧省（同一一、八六九方里）

何れを採用するとも、若し南北滿洲は滿洲を二分するの謂に用ゐんとするならば適當でないことは明である。

（二）地勢を標準として區分せんとするもの

北流する松花江と、南流する遼河、鴨綠江の各々流域を以つて南北滿洲を區分せんとする者にして、其分水嶺は公主嶺附近となり、洮南、長春は北滿に入るであらう。之は黑龍江省の存在を無視したるの區分であつて當を得た者ではない。

（三）鐵道の勢力圏に依つて區分せんとするもの

東支鐵道及南滿、吉長、四洮各鐵道の背後地を以て各々南北滿洲に區分せんとする者であつて、換言すれば、日露兩國の勢力圏を以て兩者の區別をなさんとする說にして、今日の如く露國の勢力驅逐せられ支那鐵道の建設延長せられたる時に於ては其適否を知るに苦む。

（四）貿易系統に依る區分

大連、營口、安東の背後地を南滿としボクラニチナヤ、滿洲里、其他北邊露領貿易市場の背後地を北滿とせんとするものである。然れども、かゝる經濟的勢力に依る區分は經濟界の各種狀況に依つて刻々と變化すべきもので、條約等に依つて規定すべき地域の區分法としては採用し難い者である。

此處を以て、吾人は今日に至るも南北滿洲の語を多く見聞するとは雖も、未だ明確なるものあるを聞かない。或は舊日露の勢力圏を基礎とし、貿易系統等經濟的勢力を參考とし、其面積に於て成る可く滿洲を兩分する處の境界を以て南北を分つを妥當なりと考へられる、故に滿蒙全書に於ては、琿春より鏡泊湖を經て、長棚と松花江の會合點を通じ嫩江、松花江の合流點を過ぎ、洮兒河より索岳爾濟山に及ぶ一線を以て南北二分するを適當とせんかと述べあるは、或は適せるものならむか、之に依れば東支鐵道の南部線の南半は當然南滿に入るべきである。本篇用ゐる處の南北滿も假に此說に倚ることゝする。

要するに、此問題は猶未決定の儘に殘されて居ると言ふべきである。

五　過去に於ける日滿關係

我國が最初に滿洲と交涉のあつたのは之を歷史に見るに繼體天皇の七年六月百濟を經て元に通じたが直接には西曆七百二十七年聖武天皇の朝、唐の屬國渤海王（滿洲）大武藝が寧遠將軍高仁義以下二十四人を我國に派遣せしに始る。爾來渤海國との修好關係あり西曆九百二十六年渤海國の滅亡に及んで交通絕ゆ。此間滿洲特產たる毛皮を得、我國の彩帛、綾絹糸、眞綿等が輸出された。

西曆千十九年刀伊の入寇を經て文永、弘安の蒙古襲來に次で倭寇等日滿間に軍事關係があつた。我國知

名の士にして滿洲に足跡を印したのは加藤清正で朝鮮より東間島に侵入した。時に西暦千五百九十二年。後德川鎖國に依り海外交通の杜絶して、日滿間又交渉がなかつた。日清戰爭により再び兩者の關係復活したのである。

遼東半島の割讓、三國干涉、日露戰爭と次ぎ次ぎに滿洲に交渉起り、露國の南滿に於ける權利の繼承に依つて此處に政治經濟上の日滿關係が再生して今日に及んで居る。

日本領事館が滿洲唯一の港牛莊に建設されたのは、明治九年であつたが本邦人の來往は極めて少く、明治二十四年牛莊の開港後三井物產會社は出張員を派遣し、日本郵船の定期航路開かれたが猶在住邦人は僅かに二十數人に過ぎなかつた。明治三十二年、横濱正金銀行が始めて支店を開き在留邦人も百數人となつた。當時全滿在留邦人は約千九百二名と報ぜられた。即ち旅順に五三八、哈爾濱四九五、ダルニー及大連灣三一〇等南滿千百人、北滿八百四十人の分布である。露國人は一九〇三年に既に七萬七千百八人の在留があり、日露戰爭當時は實に四十萬人の在住者が哈爾濱を中心にあつた。露國が植民のためではなく其國勢伸張のために滿洲へ四十萬の人を送つて居る事は注目すべきである。日露戰直後には其數六萬四千八百十七人に減じた。現在十一萬六千六百二十六人を算する。

爾後滿洲の地は日支關係より國際的關係に移つて行つた。ハリマンの滿鐵買收事件、法庫門鐵道問題、滿洲銀行設立運動、滿洲諸鐵道の中立問題、大正二年十月には滿蒙五鐵道の敷設權の獲得、大正四年五月の日支協約同十二月、四鄭鐵道借款契約等の曲折を經て大正六年十一月の、石井ランシング協定となり滿洲の地に我が特殊地位を占むるに及び關東州及滿鐵附屬地の背後地としての今日の勢力圏を築き上げたの

である。

日本が過去二十年間に滿蒙開發の爲めに傾倒した努力と資力とは實に莫大なるものである。即ち企業投資額十三億四千萬圓と日本政府が治安維持のため及び滿鐵の地方施設竝に文化開發に投じたる金額は實に三億二千萬圓以上に達し、總計十六億六千萬圓を超ゆるであらう。以て我國滿洲經營の一般を推す事が出來るのである。

誠に滿蒙の今日の開發の二大要因は、一は鐵道の開設、他は日本の滿洲經營と云ふ事が出來る。

第二部　滿蒙の資源

一　農産資源——總産額及輸出可能數量

滿蒙は支那本部殊に河北(直隷)山東兩省の移植民地であり、住民の大部分が農業を經營して居る關係から斯地に於ける産業の大宗は、農業であり、農産物の販賣取引、輸送が商業、交通業の主たる對照物となつて居る。更に、農産物を原料とする製造工業は低廉潤澤なる勞力と、豐富なる原料竝に資本の投下と相俟つて、特に發達の域に赴く可き氣運にあり。實に滿蒙に於ける農産は産業界の中樞なりと言ふも敢て過言では無い。其農産額は次の如くであるが、産業行政機關の不備なる滿蒙としては頗る困難なる事項の一なれども比較的正鵠を得たりと信ずる者を擧ぐれば左の如くである。

	昭和元年	昭和二年	昭和三年
大豆	三二、三〇三千石	三四、一〇〇千石	三七、七二四千石
高粱	三五、三五一	三五、七六九	三六、〇三〇
粟	二五、四三一	二七、五〇三	二八、四九一
玉蜀黍	一二、九八三	一三、〇五八	一三、三七一
小麥	五、八六四	一〇、九四〇	一一、二三五

	一一一、九三二	一二一、三七〇	一二六、八五一
計			

以上主要農産物五品のみにて既に、一億二千萬石以上の生産がある。之を滿蒙全農産額に見るに一億四千六百萬石(二千十六萬噸)に達す。而して南北滿洲別に之を計算すれば、南滿の七千七百萬石に對し北滿の六千九百萬石にして、北滿やゝ及ばざるが如きも、商品として有力なる大豆、粟、小麥は何れも其産額南滿に勝り、人口は稀薄、地方的消費少く、且つ地味一般に南滿に比し肥沃にして未墾の土壤を多く餘すだけ北滿の農産物供給量に多くの期待を爲すべきである。滿鐵に於ても、北滿農産貨物吸收に腐心する所以の一は此處にもある。

然らば果して、幾許量の農産物が東三省より輸出し得べきかに就て、極めて大略の計算ではあるが、筆者が大正十、十一年に渉つて調査せる滿洲農家の消費を基礎として算出すれば滿洲農民の一人當穀物消費量は平均二石九斗八升五合であるから東三省の總人口二千八百萬人の消費量を算出すると人口の三分の一を子供(消費量〇・五)殘りの四割を女(消費量〇・八)として計算するに五千九百萬石、種子用七百萬石、家畜飼料其他雜消費を假に二千萬石とするも計八千六百萬石となり總生産額一億四千六百萬石より控除して六千萬石(八百五十七萬噸)の剩餘を生ずる。

是れ、滿洲農産資源に對して大に期待し得る所以である。然も其穀物消費の種別を見るに、高粱五二%、粟二四%、玉蜀黍九%、大豆四%其他で、高粱、粟、玉蜀黍にて其消費量の八割五分を占めて居る。大豆、小麥類の最も多く輸出せられ得る理由亦此處に存する。

民國十六年の滿洲出稼者(滿鐵調査課第十七料資)篇　昭和二年十二月
沿昂洮線移住民の開墾契約(滿鐵調査課)　昭和元年六月
開墾地放未開墾計畫(滿鐵調査課第九號)　昭和元年九月
奉天官商の特産物占買(滿鐵調査課第二十號)　昭和元年十二月
吉林省の穀物過稅(滿鐵調査課第九號)　昭和二年九月
東三省農産物收穫高豫想(滿鐵調査課)　大正十二年以降各年
大正十二年の滿洲農家の消費(滿鐵調査課第三十號)　大正十一年七月
滿洲に於ける農産物の改良(滿鐵調査課第二號)　大正十一年六月
東三省の人口耕地及物産(滿鐵調査課第二號)　大正十年八月
滿洲に於ける青田引取況(滿鐵調査課第八號)　昭和三年八月
東三省の政府山林の他(滿鐵調査課第八號)　大正十一年三月
滿洲農産資源の生産と消費(滿鐵調査課第三十號)　大正十一年七月

二 大豆と小麥

大豆と小麥とは、地方にて消費せらるゝこと比較的少く、輸出農產物として相當期待せられ、工業用原料としても有望視せらるゝものである。此處を以て此兩者は滿洲特產物中注目すべき二大作物である。

大豆、小麥は共に北方に其主產地を有するは滿洲に於ける氣象と土壤との關係からであつて、大豆が既に世界的名聲を博せるに反し、小麥は其期待を將來に囑せしめられて居る。

大豆は、一九〇八年三井物產會社の手に依つて初めて歐洲に試搬されてより、漸次滿洲大豆の價値が認められ、歐米に於て工業用原料として、棉實、亞麻仁實、落花生、其他と角逐しつゝ油に粕に其需要の增加を來して居る。卽ち豆粕は日本內地に於ては肥料竝に飼料又は醬油原料として、歐洲に於ては專ら家畜飼料に使用せられ、豆油の用途又、各種の工業に利用せらるゝは周知のことである。

今兩者の年產額を揭ぐ(昭和三年度)

		作付面積(千町歩)	產額(千石)
南滿	大豆	一四七二	一五、一六六
	小麥	三一	一七三
北滿	大豆	二、九四四	三、五五八
	小麥	一、二六	九五三
計	大豆	三、七六五	三七、七四四
	小麥	一、三七	一、二三五

大豆は世界產額たる、五千六百萬石の六割六分を占む。

大豆の地方消費量を昭和三年度產額を基礎として推定するに次の如くである。

農民食料	三百三十六萬石
家畜飼料	百四十萬石
種子用	百八十八萬石
計	六百六十四萬石

總生產額三千七百七十二萬石より差引く時は、三千百八萬石が輸出用竝に油房用とさる。油房原料としては凡そ千四百五十萬石が向けられる現狀であるから、結局千六百五十二萬石(二百三十六萬噸)の剩餘高となる。

滿洲小麥は、大豆に亞ぐ製粉原料として重要なるものなれど小麥が、世界的食糧品なる爲多く世界の生產と市況に左右せられては居るが累年增加して居る卽ち現今一千萬石以上に達してゐる。此現象は北滿黑土地帶の開發に伴つて著しきを加へると思ふ。嘗て世界的の不作に乘じて大正九年に於て大連港のみより四十三萬九千噸の輸出記錄を殘してゐる。

滿洲內に於ける需給を見るに左の如くである。

製粉原料	六百萬石
種子用	九十萬石
計	六百九十萬石

差引き四百五十五萬石(六十五萬噸)の過剩を生ずる勘定であるが、人口增加による地方製粉(磨坊)用として消費せらるゝ數量は又少からず或は百五十萬石を超過すべく從つて出廻り數量は三百萬石を出でざるべく、滿洲全體としては近年小麥及麥粉の入超を示してゐる狀態にある。

南滿北洲小麥比較(號三第卷二第報時查調鐵滿)大正十一年三月
滿洲小麥の增加出廻數量(號三第卷四第報時查調鐵滿)大正十三年三月
滿洲大豆の產額增加其に伴ふ製粉業の活況(號四第卷四第報時查調鐵滿)昭和三年三月
滿洲小麥の作付面積(號一十第卷七第報時查調鐵滿)昭和十一年二月
滿洲大豆の水利特別取扱(號二第卷八第報時查調鐵滿)昭和三年二月
大連油房の產生制限(號一第卷七第報時查調鐵滿)昭和二年一月

三　高粱、粟及び玉蜀黍

高粱、粟、玉蜀黍の三種は滿洲土着人の主要食料品にして其生産の大部分が地方消費に充てられる。近時粟の朝鮮向輸出が注目に値する即ち、鮮米の內地輸出の跡に滿洲粟を以つて鮮人の食糧を補充し、間接に日本內地の食糧問題に貢献してゐるのが滿洲粟である。

朝鮮向滿洲粟の輸出數量昭和二年に於ては三百二十萬石に達した。

高粱は年產額三千六百萬石、大豆と產額を上下す。土人は子實を食料とし高粱酒に釀造せられ稈は滿洲の嚴寒を凌ぐ可き燃料又は地方小工業用燃料として値も廉に、或は農民が家屋の建築材料として將た家畜飼料として萬般の用途を有し、實に滿洲農家必須の產物である。植生上、滿洲の土地に恰適の農作物である。粟又農民の食料として黃酒の原料となり、家畜の飼料として產額滿洲第三の農產物である。玉蜀黍は南滿地方に於て主として農民の食料とせらる。稈は燃料たる事又高粱稈と同樣である。

是等の工業的用途としては現在、僅に酒精の原料となるのみ高粱稈を原料とするパルプ製造は我社中央試驗所の研究に依れば木材パルプに比して有利なる採算を示し居る。たゞ原料稈を遠隔の地迄運搬するの不利は大工場設立を困難ならしめるであらう。玉蜀黍よりの澱粉製造工業は企劃せらる可き事業たるを失はぬ。油房と製粉を出でない滿洲の製造工業に是等豐富なる農產加工業を加入したき者である。現在高粱、粟、玉蜀黍共に剩餘は原料のまゝ輸出され支那、朝鮮の食料品日本內地の飼料となつて居る。

滿洲の田水話（大正七年五月、第十二號滿鐵調査課トツレフンパ）
商品と米滿洲の粟（昭和二年六月、第三十二號滿鐵調査課トツレフンパ）
朝鮮人の水田耕作に對する支那側の締取（大正十四年十月、第十號滿鐵調査時報第五卷）
滿洲水田概況（大正十四年二月、第二十號滿鐵調査時報第五卷）

四　滿洲米

米は滿洲土着人の珍重する食料であつて、各節句、盆、正月、冠婚葬祭等のみに食用する。現在、陸稻糎百六十萬石、水稻糎、百五十萬石あり、白米として約百二十萬石、滿蒙農產資源としては特に重ずるに足りないが、將來の水田として開墾見込地五十八萬町歩乃至百萬町歩と稱せられ、此の產額一千萬石以上に達すべく、陸稻栽培面積又、增加を見るべきを以つて、將來注目すべき資源たるを失はぬであらう。今昭和三年度に於ける收獲豫想を掲ぐれば次の如くである。

		作付面積（百町）			收穫高（千石）		
		南滿	北滿	計	南滿	北滿	計
水稻		五七	二四八	八三六	一〇八四	四七四	一、五五八
陸稻		八三	一五六	一〇九	一、三八六	二七〇	一、六五六

南滿に於ては、奉天地方、奉海鐵道沿線及間島地方を、北滿に於ては東支東部沿線及松花江下流地方を主產地とする。

現在滿洲に於ける米の需給狀態を見るに、約二百萬海關兩程の輸入超過を示して居るから、滿洲米のみを以つてしては供給不足の現狀であるが支那人の米作經營者の增加と吉敦鐵道の開通に伴ひ沿線へ鮮人の進出して水田經營又盛となり生產の增加は漸次自給自足の域より、更に輸出超過の狀態となるのも決して遠い將來ではないと思ふ。

五　柞蠶

柞蠶の支那に發見されたのは千數百年前であるが、産業の一となつたのは清朝以後で滿洲では百餘年前蓋平地方で柞蠶絲の取引が行はれたといふ。

柞蠶は滿洲至る所の山野に産出するも就中有名なるは、蓋平、岫巖、安東、寬甸の諸縣下であつて、海城、遼陽、鳳城及復の諸縣之に次ぎ近年海龍、柳河、西豐竝に關東州内に於ても發達しつゝある。年産額を詳にせざるも平均七十五億萬粒とせられ、製絲工場は安東、蓋平、海城、西豐其他に散在し其數千餘を算す。柞蠶絲の輸出又平均二萬二千擔(一千萬海關兩)以上に達し主として安東經由日本に輸出せられ輸出絹紬の原料となる。

關東廳調査に依る將來柞蠶飼育可能面積は百五十二萬町歩にして遼寧省は過半八十六萬町歩を占む。此産額三百八十億萬粒となる。將來有望の産業の一たるを失はない。

六　其他農産物

滿洲に於ける上述以外の農産には、大麥、小豆、黍、稗、蕎麥、燕麥、馬鈴薯等の普通作物と大麻、青麻、煙草、胡麻、箆麻、荏、甜菜、棉花等の工業原料たる特用作物と、熊岳城以南殊に關東州内に近時勃興して來た果樹園藝がある。何れも産額の上より見る時は論ずるに足らない上に産地は特殊の地方に限られて居るが如き不利がある。

關東州内に於ける果樹、棉花の栽培は有望視せらるゝ者である。

滿洲柞蠶業調査(一)大正十年二月
滿洲柞蠶業調査(九)大正十年二月
滿洲柞蠶業調査(一)大正十年四月
大連安東兩柞蠶業取引數量調査(一)大正十年三月
滿洲柞蠶業概況調査(二)昭和二年三月

線麻の重要産地は遼寧省海龍、西豐、西安地方、蘇子河、渾河地方及び吉林省、東間島、南山地方、拉林、牡丹江上流地方で約二萬町歩に及ぶ。拉林河、松花江、呼蘭河、通肯河流域地方は何れも種實の栽培を主として居る。其産額百萬石に及ぶ。青麻又二萬町以上にて上記地方の外遼河、嫩江、豆滿江流域を主産地とする。

煙草は、遼寧省では桓仁、開原、海龍、東豐、西豐、西安等の諸縣吉林省では吉林、樺甸、磐石、額穆、敦化、寧安、五常、雙城、賓の諸縣、黑龍江省では呼蘭、巴彦、海倫、蘭西等の諸縣を主産地とする。

今是等特用作物の産額を示せば左の如くである。

	作付面積	産額
線麻	二〇、〇〇〇町	一六、〇〇〇、〇〇〇斤
青麻	二三、〇〇〇—二五、七〇〇	二四、〇〇〇、〇〇〇
煙草		四三、八九九、三〇〇

七　邦人の滿蒙に於ける農業經營の可能性

滿蒙に於ける可耕地面積の推定、約二千餘萬町歩で、既墾地面積は滿洲に一千三百萬町歩、東部内蒙古に於て百五十萬町歩、可耕未墾地は尚六百萬町歩を殘して居る。殊に、黑龍江省に於ては、可耕地面積の六、七割を未開の儘に殘して居る。現在年々開墾せらるゝ面積は約二十萬町歩以上といふ。若し此速度を以て開墾が進むとするならば、可耕未開墾地を開拓するに猶三十箇年を要するであらう。

然らば此の廣大なる未墾地の開拓に邦人が貢献し得るや否やといふに、現在滿蒙に於ける土地に關する

東蒙古概況調査(九)大正十年四月
滿洲小麻産出概況調査(一)大正十年二月
滿洲豆類産出概況調査(二)大正十年二月
吉林省麻類産出概況調査(七)昭和二年七月
滿洲煙草概況調査(四、三)昭和二年四月

日本人の權利が甚だ不確實である。土地に基礎を置く農業經營に於て、其の根柢が不確實なれば此企業は成功の見込がないものと言はねばならない。併し、滿洲の土地に對する、日本人の權利は、大正四年五月二十五日の日支條約に於て、南滿洲土地に對する商租權が認められて居るのである。土地商租とは、三十箇年迄の長期限附で、且つ無條件で、更新し得べき租借である。又、東部內蒙古に於ては、支那國民と合辦で農業及附隨工業を經營し得るのである。然るに、該條約締結後に細則の締結なく支那側としては自國の領土內に、日本人をして所有權に等しき商租を成さしむることを成可く避けんが爲めに、日支間に細則なきに乘じて、商租須知なるものを制定して、商租の意義を頗る狹義に解釋し、又支那人にして日本人に土地を商租せしむる者に、種々壓迫を加へ、且つ民國九年十二月二十五日商租稅則を制定して過當なる商租稅を徵收する等事實上、日本人が南滿洲に於て土地商租をなし難い狀態に至つて居るのである。

土地の權利右の如くなるも、將來商租權の正當なる解決がつきたるものとして、或は又關東州內に於て邦人は支那農民と果して相拮抗して農業經營に成功し得るであらうか。

其の生計費を見るに、支那農民一人當左の如きものであつて、到底吾邦移住農民の之に競ひ難きを知ることが出來る。

	食料費	衣料費	住居費	光熱費	雜費	合計
自作農 小農	四八三〇円	七〇六円	四一〇六円	四〇四五円	三五〇〇円	六四二九円
自作農 中農	四三〇六	三二二六	六四二六	二一八〇	四〇〇〇	七六九一〇
自作農 大農	四九七四	九八七七	八九九五	二六一八	四三〇〇	八四七三四
自作農 平均	四三八一	九七三	六八四二	八九四八	四〇〇〇	七三三四
小作農 小農	三四四三	四三六	四四五四	八二〇六	三五〇〇	五四九七二
小作農 中農	二六二八	一〇八六八	五二一九	二二一〇六	四〇〇〇	五八二五一
小作農 平均	三〇二六六	七六二三	四八〇六	一〇二五六	三七五〇	五六六二一

月十年九正大（篇一第料資査調鐵滿）租商地土、要概習慣諸事滿我
月三年三和昭（篇五十七第料資査調鐵滿）蒙滿と題問口人國去過
月二十年三和昭（號二十第卷八第報時査調鐵滿）力著定の民移那支洲滿るけ於に間年數去過
月一十年二和昭（課査調鐵滿）究研較比の業農滿日と質特の業農洲滿

且つ、其の體力に於て到底支那農民に敵すべくもない上に、氣候、風土を異にするを以て日本農業を直に此地に移し難く多くのハンデイキャップが附せられねばならない。從つて、支那農民と同樣の經營法に依つて、同樣の收益を擧げるに於ては、到底此地に於ける農業經營は、日本人には引合はないのは當然である。況や近時の山東移民の大洪水の波がおしよせて來てゐる。

故に、在來農業に勝るの收益を擧ぐるが如き農業經營を行ふことに依つて其の生活費を補ひ、機械力に依つて體力を償はねばならない。此點に於て農業の科學的經營法に依る外はない。或は又、特殊の技工を必要とする果樹栽培の如きも推賞さるべきものであらう。從つて、農業移住者が若し可能であるならば農業的學識と經驗ある者にして、若干の資金を用意する者でなければならない。此點は亞米利加邊の日本移民と其の趣を異にしなければならない點である。

土地商租權が確立せられたと假定すれば、かゝる農業者の滿蒙に於ける植民は、日本の爲めにも支那農民の啓蒙の爲めにも、是非共招致して日支兩國の開發に資せねばならない。滿鐵會社に於ても計畫の農事會社は其の用意と助成より成るものであり、一百姓の招來でなくて若干の資力と知識ある農業移民計畫である。

月八年四十正大（篇八十四第料資査調鐵滿）業農地燥乾と候氣の洲滿
月七年一十正大（卷三十第書告報査調鐵滿）費消と產生の家農洲滿
月四年三和昭（號四第卷八第報時査調鐵滿）情事者稼出洲滿の省東山
昭（號十、九卷八第報時査調鐵滿）計統動移力苦隷直東山るけ於に洲滿南期半上度年三和昭
月十、九年三和

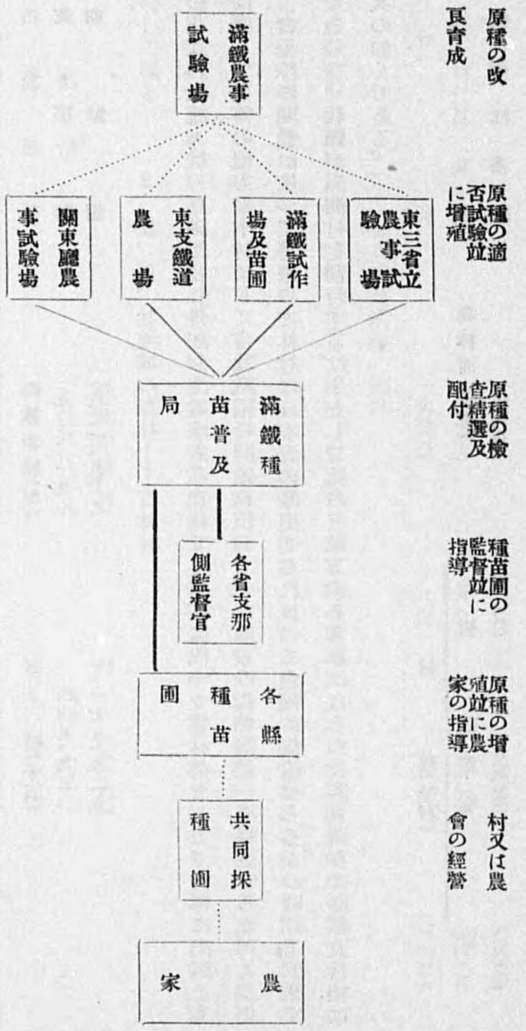
滿蒙農業の科學的經營は確に農産物の增殖法たるに相違なく、農業學校の增設を希望すると同時に、此處に吾人の提唱せんとするは我滿鐵に於ても十數年農事試驗の結果育成せる特産物の優良種苗を組織的に配付し普及せしむることである（尤も鐵道沿線には既に大豆種子を配付して相當成績を擧げてゐる）若し改良されたる優良種子を全滿に普及せしめたりとせんか、作付面積を假に現今の儘とするも、收量に於て一割の增收ありとせば、大豆三百七十萬石、高粱三百六十萬石、粟二百八十萬石、玉蜀黍百三十萬石、小麥百十萬石の增收を得て主要穀物一千二百六十萬石の增收を得るであらう。

又現在一頭二斤の産毛より得られない蒙古在來綿羊は、同改良二回雜種を普及したりとせんか、現在の二百萬頭の儘としても現今の産毛四百萬斤に對して一躍千四、五百萬斤となる。

右の如く其の量に於て增加するのみならず其の質に於て改善さるゝことは誠に大なるものがある、以て優良種苗普及の效果を推すべきである。

種苗普及及配付計畫に關して、筆者は嘗て日支共同事業として原種の生産を滿鐵に於て原種の增殖を滿鐵及支那側の種苗圃に於て行ひ、支那側をして東三省優良種苗普及規則を制定せしめ、自主的に普及配付を各村屯長竝に警察官の手に依つて行はしめ、農會等自治團體の有力なる者には此手に種苗圃及配付を司らしめ、配付は原則として無償又は農家所有種子との交換により、第一期計畫として大豆、小麥、高粱等主要農産を以て初め五箇年を以つて完成する案を樹てた。

今優良種苗の配付を圖解すれば次の如くである。



かくて滿鐵に於て苦心研究の農事改良試驗も結果ありといふべく、日支共同して滿蒙の農産開發に當り得るといふものである。且つは、滿蒙農牧の改善と農産の增加を圖ることゝなり、一は以て滿蒙三千萬農民の收益を增加して福利增進となり東亞に於ける衣食糧問題に貢獻する處あり、他は以て我國への供給量の增加を來し眞の日支共榮共存を來さしめる所以である。

九　林産資源——森林の分布

滿洲に於ける森林地帶は北東の地方に分布し、南滿及蒙古地方は無木の地方が多い。凡そ次の七箇所となす次に記する統計は又既往の調査より締合せし者にして調査後十數年を經過せるを以て、其大勢を察知する資料のみ。

1　鴨綠江流域の森林――鴨綠江材

鴨綠江流域の森林、右岸は支那側、左岸は朝鮮側に屬し、安東に出廻る鴨綠江材が之であり、滿洲側の年平均伐採量は百萬石以上と推定されて居る。

	森林面積(町)	材積(千石)
支那側	九〇三、一九一	四四五、九五〇
朝鮮側	一、八〇二、九六八	一、一七八、九二九

2　松、豆、牡流域の森林――吉林材

松花江の上流々域、豆滿江及牡丹江の流域地方の森林で從來筏に依つて吉林材として、吉林に出廻るものは概して是等の地方の木材にして吉敦鐵道の開通に依つて、此地方の森林開發一層促進せらる可く、更に吉會全線の開通に依つて將來の吉林材は日本海に搬出せられ以つて我國に供給せらるゝの時期も到來するであらう。我國が滿洲材を期待するは主として此の三地方であらねばならぬ。調査濟みの面積及材積は約次の如くである。

	森林面積(町)	材積(千石)
松花江系統	一、四〇五、九四七	針葉樹 四四〇、八九七
		濶葉樹 五〇六、七〇〇
		計 九四七、六〇七
豆滿江系統	三四〇四五	四七、八九三
牡丹江系統	三四、八七三	二、九七三
合計	一、九六三、八六四	六〇八、七六三

3　東支鐵道沿線の森林

東支鐵道東部沿線、賓、同賓、寧安、穆稜、東寧の五縣に跨る區域にして、鐵道開通前は一帶の密林にして鐵道工事測量にさへ困難を來し、俗に樹海と稱せられた。又西部沿線は興安嶺の森林にして其位置の關係より密度東部沿線地方に比すべくも無いが日支露三國合辦の札免公司は此内にある。前二者が水運に依つて搬出せられて居るに反し、本地域は多く鐵道に依り、伐採權は多く露人の手に在りて多くの引込線を有して居る。

	森林面積(町)	材積(千石)
東部沿線	二、三三八、八一八	八〇二、〇二〇
西部沿線	二、〇六七、三〇〇	五〇〇、〇〇〇
合計	四、四〇六、一一八	一、三〇二、〇二〇

4　三姓地方の森林

吉林省の東北部を占め、松花江、黑龍江、烏蘇里江の間に狹まれた地域、方正、依蘭、樺川、富錦、同江、綏遠、虎林及密山の諸縣に跨る地方の總數にして區域廣大、材積又多きも、交通不便にして水流の關係上哈爾濱其他南滿に關係を有することが多くない。

森林面積五、四一九、三三二町　材積一、三九五、六一〇千石に達す。

滿洲の森林(露文調査報告書第四號)大正十年六月
東三省森林法規類纂(滿鐵調査資料第八十五篇)大正十五年九月

滿洲に於ける木材の需給狀況(滿鐵調査報告書第九號)大正十年二月
滿洲の炭木資源(滿鐵調査報告書第九號)大正十年三月
滿洲炭木材の引取(滿鐵調査報告書第十號)大正十年三月
東支附屬地林森租借權及採炭權(滿鐵調査報告書第六號)大正十年三月
國有林放下章程(滿鐵調査報告書第八號)昭和三年七月
吉林省北東部林業(滿鐵調査報告書第七號)大正十年四月
南滿洲鐵道沿線の森林(滿鐵調査報告書十八號)昭和元年十二月
吉林省の森林(滿鐵調査報告書十八號)昭和三年七月

滿洲森林に存する樹種は知られたるもの約三百種以上に及ぶが、普通なるは八十餘種、最も多きは針葉樹にあつては、テウセンマツ(紅松)、テウセンタウヒ(魚鱗松)、テウセンモミ(杉松)、タウシラベ(臭松)ダフリカカラマツ(落葉松、黄花松)等、濶葉樹ではカウライミヅナラ(柞木)、シラカンバ(樺木)、アムールシナノキ(椴木)、ヤチダモ(水曲柳)、ハルニレ(楡木)、ドロノキ(楊木)等である。

是等の混淆歩合を見るに、針葉樹が四割、濶葉樹六割であり、テウセンマツは針葉樹中の過半を占め、モミ、タウヒ類が三割を占め、濶葉樹ではナラ、カシハ、シナノキ、ハルニレ、ヤチダモ、ヤマナラシ、ドロノキ等約七割を占めて居る。

一〇　供給木材の數量附パルプ原料

滿洲に於ける調査せられた總森林蓄積材量は前述の通り四十四億五千九百萬石にして、滿蒙の面積の大に比して甚だ少い、全日本(樺太、朝鮮、臺灣を含む)の蓄積材量百一億六千三百萬石に比して其半にも滿たない。決して豐富なる林産資源と言ふ事が出來ない、たゞ交通不便なると、地方需要の大ならざるに由り其伐採數量の少きため、若し假に現在の儘の伐採數量とするならば、其の生命は比較的長きを保つを得るであらう。此點に期待がかけられてゐる。

現在に於ける供給數量は、確實なることを知り難いが、年額大約次の如く推定することが出來る。

鴨綠江材	百三十萬石——二百二十萬石
吉林材	五十萬石——百萬石
間島及琿春材	二十萬石——五十萬石
北滿材	百三十萬石——百七十萬石
合計	三百三十萬石——五百四十萬石

であつて、建築材、枕木、柞木、棺材等に利用せられて居る。嘗て新義州に王子製紙の朝鮮分工場安東に鴨綠江製紙會社が木材パルプ工業を營んだことがあるが目下の木材では廉價なる輸入パルプには到底生産引合はざる爲め何れも休業して居て、斯業の前途は容易に樂觀し難いものがある。

滿洲の林産は前述の如く蓄積材量に於て豐富ならざる上に、其の出材量又少く、甚だ振はず、之が爲めには森林鐵道を敷設して出材を容易ならしむる一方、林政の實を擧げしめて逐年荒廢に傾く森林保護の方途に出でなければならないのである。

次に林産工業の内パルプ製造は滿蒙竝に日本に於ける製紙原料の需給上必要なる企業で、嘗て操業せられたことは前述の通りであるが今將來の爲めに筆者が推算せるパルプ用木材の蓄積量を掲げて本項を終るくである。

原料木材の樹種　テウセンモミ、テウセンタウヒ、タウシラベ、パルプ用としての造材蓄積量は次の如

鴨綠江材	一七、二四二、八〇〇石	
吉林材	五一、一七七、八五〇	
北滿材	七、六六八、六八九	
三姓材	六三、三二五、七七八	

合計　一三九、四一五、七一七

一一　畜産資源——家畜の頭數

滿蒙に於ける畜産業は頗る幼稚の域にあつて、東三省に於ては牛、馬、騾等の大動物は主として農家の役用たり羊、豚、鷄等の小動物は自家食肉用の爲めに農場の廢棄物を以て飼養せらるゝに過ぎない、從つて畜産として世人の期待すべきものは極つて少い。之に反し、東部內蒙及其他蒙古に於ては農耕を營み難い地方は、住民主として遊牧的生活をなし、多量の畜産ありと雖、其牧畜の方法は原始的の域を脫せず、世界畜産界の長足の進歩の影響を受くること殆どなく、加ふるに交通の便開けず、生產物の搬出又至難なるありて、其將來には相當期待すべきものあるべきも、現在畜產資源としては地域の廣漠たるに比して其の乏しきを知る。

滿蒙家畜の頭數に至つては、其調査區々であつて何れを眞とすべきやに惑はざるを得ないが、今調査課の推定せる昭和四年度の概數を擧ぐれば次の如くである。

	遼寧省	吉林省	黑龍江省	計	東部內蒙古	外蒙古
牛	四六萬頭	四〇萬頭	六六萬頭	一二五萬頭	一一二萬頭	一〇〇萬頭
馬	七二	六八	一〇二	二四二	八一	二〇〇
騾	二五	二六	一五	六六	七	—
驢	三一	一一	五	四七	一〇	—
羊	四三	一八	一九四	二五五	二〇〇	八〇〇
豚	三五六	二一九	一七九	七五四	一〇〇	—

東三省の牛馬の頭數を我日本に比するに馬に於て、東三省は百萬頭の多きを示せど牛に於ては殆ど其差を認め難い。是れ蒙古人以外に支那人は乳、乳製品の利用をなさず、從つて乳肉牛の飼育少なきによる。されば牛肉の供給上より見るも滿洲は俄に有望視する譯には行かぬ。蒙古地方に於ける上揭の統計に至りては何人と雖も之が正否を論斷し難き位の不確實さである。

一二　畜産製造品

乳及乳製品に於ては在滿外國人が之を利用せる外、蒙古人が獨特の方法に依つて各種の乳製品を利用するのみで商品的利用は殆どない。

肉製品に就ても同樣で東支沿線に於て露國人がハム、腸詰を製造してゐるのと南滿、大連、普蘭店其他に僅に肉製品の工場を見るのみで擧ぐべきものがない。

今肉に就て見るに、蒙古系統の牛は特に肥脂するでなければ山東牛にも劣るは勿論、內地牛に遙に其食味が劣る。精肉步合は必ずしも內地牛や山東牛に比して遜色あるものではないが、蒙古では牛は乳用を主とし肉を副とせる關係上肉用として良好でないから、其使用途に應じて相當すべきである。在來豚は又其體格惡く一頭の肉量亦少く、滿洲豚中型種は體重二十貫內外である。殆ど地方消費に充てられて居る。

畜產製品中最も有望なのは毛及毛製品である。毛の內其主なるものは羊毛であつて、東三省に於て百萬斤、東部內蒙古三百萬斤、其他外蒙古百萬斤、合計四百萬斤の產毛ありと見るべく全支那產毛四千五百萬斤の約一割八分に相當して居る。羊毛の品質も良好でない。濠洲產毛等に混じて製絨するか又は絨氈用と

なし得るに過ぎない。羊毛は今日殆ど我國に利用せられて居ない。

豚毛は滿蒙に於て約三百萬斤、內豚鬃の輸出は百萬斤內外を算して居る。主として刷子用とされ雜毛は充塡用等に供せられる。

右の外馬鬃及馬鬃の年產は約九十萬斤、駱駝毛若干、牛毛百六十五萬斤があり以上是等諸毛は毛製品として當地に於て毛氈、緞通等に製せられて販賣せらるゝ外其儘輸出せられて居る。

皮革には牛皮、馬皮、羊皮、豚皮等がある品質下等なれど產額も多い。滿蒙の地は支那に於ける高級毛皮の產地にして鼬皮、栗鼠皮、狐皮、砂狐皮、貂皮、タラバカン皮、狸皮　犬皮、猫皮、仔羊、山羊皮が主なるものである。以上東三省に於て二千四百萬枚と稱せられて居る、實に全支那輸出額の半以上は滿蒙產品である。

羊腸、豚腸、牛腸等の獸腸類は主として米、獨、英等に輸出されてゐるが食用、運動具用、飛行船氣囊用等の材料となるが蒙古人の如き未だ放棄するものあり我等の開拓し得べき資源たるを失はぬ。

昭和二年度に於ける滿蒙畜產品の輸移出額を大連、營口、安東(南滿)滿洲里、綏芬河、松花江對岸、哈爾濱(北滿)に就いて見るに次の如くである。

	南滿	北滿	合計
豚毛	七九三、〇八八円	一円	七九三、〇八八円
羊毛	四八〇、〇八〇	二、三〇四、九四〇	二、七八五、〇二〇
其他毛	一九八、一〇五	三六、九六七	二三五、〇七三
皮革	二二一、一〇二	三、八九二、三七四	四、一一三、四七六

南滿三港移輸革皮狀況(號一第卷七第報時查調鐵滿)昭和一年二月
滿洲於ける骨獸の類肉の加工業(號一十第卷七第報時查調鐵滿)昭和二年二月
滿洲於ける畜產資料(篇一十四第報時查調鐵滿)大正十三年九月

角	九、七七七	一	九、七七七
獸骨	一、二一六	一	一、二一六
家畜	六三、二五四	一一五	六三、三七〇
獸脂	三四五	六五、一一一	六五、四五六
鷄卵	二二、二八二	八六三、〇五六	八八五、三三九
獸腸	九〇、八四二	二二、〇三二	一一二、八七四
毛皮	二、五五二、一五三	一六、五三一、二〇〇	

畜產市場としては奉天及び天津を大市場として哈爾濱(海拉爾、滿洲里、齊々哈爾)、鄭家屯(伯都訥、洮南、白晉太來)、赤峰(錦州、開魯、小廂倫、朝陽、烏丹城、住棚、林西)、張家口(多倫諾爾、歸化城)等は中繼市場となつて居る。

是等畜產品竝に其加工品は、動物の品種粗惡で加工技術幼稚な上に概して家內工業の域を脫しないので其主產物は決して優良ではない。其改良增殖は將來に期待せねばならないが、土地の廣い點での將來は注目すべきである。

一三　水產資源——魚獲高

滿蒙に於ける水產中魚介類は、海岸線が短く、冬季凍結して漁業困難なると漁場面積の小なるを以つて大なる生產は望み難い。滿蒙の漁業は海產と河川湖產とに分つ事を得、其海產漁獲高を見るに次の如くである。

黃海岸	二、八一二千斤	三五一、一五〇円

渤海岸	一、〇〇七、〇〇〇	一
關東州	三、五一四、一一四	六、二六二千貫

其他鴨綠江、遼河、渾河等の南滿諸川よりする約六十萬貫、松花江、牡丹江、嫩江及呼蘭河等の北滿諸川よりの約百二、三十萬貫及び湖沼よりの若干の漁獲がある。滿蒙に於ては他の產業に比し特筆すべきものが無い。到底現在竝に將來に於て滿蒙三千萬の人との需要に應じ難い。

一四 關東州の鹽業

滿蒙に於ける鹽業は海水製鹽と鹽池製鹽とに分れるが、東三省に於ては專賣制度が敷かれ、大體自給自足であつて輸出能力とてはないと見て然る可く、寧ろ輸入をしなければならぬ樣にならう。之に反し、滿蒙に於ける海岸線の尖端を占める關東州に於ては鹽に就て莫大なる供給力を有して居る。

元來黃海及渤海は雨少く蒸發盛なる爲め海水の鹽分濃厚で鹽業に最も適し鹽田は總て天日製鹽である。關東州に於ける鹽田面積の最も大なるは貔子窩地方竝に普蘭店地方であつて五千七百三十餘町歩、州鹽田總面積の大部分を占めて居る。關東州內鹽田面積を地方別に擧げると次の如くである(昭和二年末現在)

地方別	日本人鹽田面積	支那人鹽田面積	合計面積
旅順管內	九三〇・六五町	一八五・一四町	一、一一五・七九町
大連管內	四〇・四〇	四・一三	四四・五三
金州管內	—	八一・五〇	八一・五〇
普蘭店管內	二、四五〇・七二	三六五・九四	二、七七一・六六

月一年四和昭(編九十八第料資查調鐵滿)給需の物產水るけ於に洲滿
月八年四十正大(卷三十二第書告報查調鐵滿)業漁の海渤黃
月二十年元和昭(號二十第卷六第報時查調鐵滿)げ上引稅鹽省三東
月六年四十正大(五十第トツレフンパ鐵滿)て就に題問るすと港漁を順旅
月八年四十正大(號八第卷五第報時查調鐵滿)て就にるすと港漁を順旅は或子城營、連大

貔子窩管內	一、九九一・四一	九七二・三四
合計	五、三六八・一八	一、六〇九・〇五

	二、九六三・七五	二、九六三・七五	
	六、九七七・二三	六、九七七・二三	

其生產高は年の天候に依つて豐凶常なきも、平年產額約四億萬斤內外である。左に最近五箇年の生產高を示す。

年別	日本人製鹽高	支那人製鹽高	合計
大正十三年	二四九、九二〇、八八〇斤	一七二、四九九、七〇〇斤	四二二、四二〇、五八〇斤
同十四年	二五六、五一四、七〇〇	一五九、九二二、六二〇	四一六、四三七、三二〇
同十五年	三一七、〇四〇、八五二	一八四、六七五、四二二	五〇一、七一六、二七四
昭和二年	二六四、三一五、三〇〇	一二七、七七三、六〇〇	三九二、〇八八、九〇〇

關東州鹽の需給狀態に就いて見るに總產額四億萬斤の內、州內の需要約二千萬斤で殘三億八千萬斤は全部輸出可能性を有するものである。其仕向先は日本內地の約二億萬斤、朝鮮の約一億萬斤、其他樺太、沿海州等へ約五千萬斤等である。

最近五箇年間の州鹽移輸出高を揭ぐれば次の如くである。

年別	日本內地輸出	朝鮮輸出	州內移出	其の他	計
大正十二年	三三一、五〇六、一三〇	一二九、八六二、三九〇	二四七、三一三、四九〇	二〇三、八六〇	三六八、二一〇、九七〇
同十三年	三三一、五三一、五二九	六八、〇〇三、三一八	一七、九三八、七三九	三、九六七、三六〇	三三一、四三九、九五六
同十四年	一六八、八六六、三四六	一三三、九二〇、五三五	三一、五一九、六四八	四、二八七、二四〇	三三七、六二三、七五九
同十五年	一三〇、七四〇、二一六	一六七、九六六、八一六	二二、五一三、八九四	四、三九九、九〇五	三三四、六四〇、八三一
昭和二年	六七、六三四、五六九	一三五、一三六、五三三	三三、七九六、七二八	二、八六一、九二七	二六四、八二九、七五七

州鹽の輸移出年々增加の傾向にあるも逐年の鹽田竣工、產鹽の增加に依り尙巨額の次年持越鹽を有し販路

月三年二十正大(篇三十第料資查調鐵滿)業鹽の州東關
月四年五十正大(篇一十五第料資查調鐵滿)業鹽の州東關
(年三和昭)覽要廳東關
月九年五十正大(篇七十五第料資查調鐵滿)後今の鹽州東關と鹽島青
月十年五十正大(篇九十五第料資查調鐵滿)計統業鹽州東關年四十正大
月六年三十正大(號三第トツレフンパ鐵滿)來將と態狀銷販鹽州東關るけ於に近最
月六、月一年三和昭(篇八十七、二十七第)料資查調鐵滿(年二、元和昭)計統業鹽州東關

の擴張は目下の急務である。

鹽持越高表

年別	日本人製鹽	支那人製鹽	計
大正十四年	一五七、八四〇、八七二斤	三三、七四〇、一六〇斤	一九一、五八一、〇三二斤
同十五年	三〇一、三二八、一八四	七〇、三〇八、三六〇	三七一、六三六、五〇〇
昭和二年	三七八、七九八、二四〇	六三、七四六、二二〇	四四二、五四四、四六〇

關東州鹽の現狀既に斯くの如く多くの供給力を有してゐるが、其將來は果して如何、關東廳が大正十四年鹽田適地の位置面積、築造費、生產力、運輸狀態等の調査結果は開設箇所三九、第一候補地七、四六五町歩、第二候補地二、六二九町歩、計一〇、〇九五町歩を擧げ其生產豫想を次の如く決定した。

將來の製鹽豫想高

既成鹽田全部熟成後の生產見込	五九三、〇四五、〇〇〇斤
將來開設適地全部鹽田完成後の生產見込	九〇〇、〇〇〇、〇〇〇斤
總計	一、四九三、〇四五、〇〇〇斤

實に十五億萬斤の生產があり更に甚だ粗放的なる支那人鹽田の修理改良、將來鹽田地として干潟地を利用するならば、以上の產額は決して過大のものと言ふべからず以つて州鹽の將來を察すべきである。

一五　鑛產資源——鞍山製鐵

滿蒙に於ける鑛產資源としては金、銀、銅、鐵、鉛及亞鉛の金屬鑛物と石炭、菱苦土鑛、白雲岩、石

鈴木商店が鹽田を落沒した（號六第卷七第報時查調戯滿）來將の鹽州と關東州鹽業の狀況（號二第卷八第報時查調戯滿）月二年三和昭
關東州鹽の輸出を檢査相色（號七第卷八第報時查調戯滿）月七年三和昭
關東州鹽業の發達と鹽政（號十第卷五第報時查調戯滿）月十年四十正大

灰石、硅石、滑石、石綿、螢石、長石、天然曹達、岫巖石、粘土及各種石材等の非金屬鑛物を產出するが就中資源として重要なるものは金、鐵、石炭、苦土鑛である。

金は殆ど砂金であつて黑龍江省の二三を除けば多くは規模小さくて擧ぐるに足らないし且交通不便で採掘搬出に馬賊匪賊の患がある。これ搬出には飛行器を用ふべし等稱へらるゝ所以である。產地の分布は黑龍江省最も多く鑛區百十三と稱せられ、遼寧省五十四であつて產額亦不明なれども約二百萬元なりといふ。

銅鑛としては天寶山銀銅鑛、盤石銅鑛、皮洲哨子銅鑛が小規模に精練に從事せるのみである。滿洲に於ける鐵鑛石の埋藏量は莫大なるもので、鞍山の弓張嶺一帶を最大とする。卽ち、

鞍山鐵鑛（日支合辦振興無限公司）遼寧省海城縣、遼陽縣
廟兒溝鐵山（本溪湖煤鐵公司）遼寧省本溪縣
弓張嶺鐵鑛（中日官商合辦弓張嶺鐵鑛無限公司）遼寧省遼陽縣

を主なるものとし、埋藏量は不明なれど莫大なるものがある是等の原料により工業的に製鐵事業を經營して居るのは滿鐵の鞍山製鐵所、（埋藏量約三億萬噸）及本溪湖煤鐵公司二あるのみ、何れも貧鑛なるは其一大障害となれるも貧鑛處理の方法が決定せられて、製鐵業に對する曙光が認められつゝあることは既に周知のことである。

卽ち昭和二年度に於ては、銑鐵年產額二十萬瓲を超えた。而して目下增產計畫の實施中にして從來三百瓲二基なりし鎔鑛爐に五百瓲爐一基を增設し在來のものは三百五十瓲に改造し年產銑二十八萬瓲とせんと

鞍山製鐵所の銑鋼一貫作業計畫（號八第卷八第報時查調戯滿）月八年三和昭
我國に於ける鐵鑛石の埋藏量と內地製鐵業（滿鋼戯滿）月二十年二和昭（號二十第卷七第報時查調戯滿）
我國に對する鞍山鑛原の供給問題（滿鐵調査戯滿）月五年三和昭（號五第卷八第報時查調戯滿）

し、本年九月完成の豫定增產計畫完成後全能力を發揮する時は年額四十萬瓲の出銑を得。內二十四萬瓲を以て鋼材二十二、三萬瓲を生產せんとする銑鋼一貫作業が計畫されてゐる。かくて我國製鐵の自給自足の實現に進みつゝある。

其他鑛產には、菱苦土鑛は耐火煉瓦用として大石橋附近に殆ど無盡藏に產出せられ、東部內蒙古には天然曹達の產出を見る。

一六 石炭

期待の少い滿蒙鑛產資源の內にあつて、石炭のみは實に最も重要なる地位を占むるものである。石炭礦區數は其炭質の良否を論ぜざれば五十以上に及び推定總埋藏量は三十億萬噸に達す。其分布南滿二十五億、北滿五億萬噸である。

其主要なるものは新邱、撫順、札來諾兒、本溪湖の各炭坑にして何れも埋藏量一億萬噸以上あり、今昭和二年度に於ける各地方別主要炭坑の推定埋藏量及出炭量を示せば次の如くである。

地方別	炭礦	埋藏量（百萬噸）	出炭量（噸）
滿鐵本線	煙臺	四〇・〇	一四三、〇〇〇
	尾明山	二・〇	六八、五〇〇
	攀盛堡	三二・〇	一二二、〇〇〇
	大疙瘩	七・二	一三五、〇〇〇
	復州	二〇・〇	
	其他	一〇一・二	四六八、五〇〇
計			
安奉線	本溪湖	一二〇・〇	四〇三、七二七
	牛心臺	一五・〇	七四、五〇〇
	其他	八〇・〇	二〇、〇〇〇
計		二一五・〇	四九八、二二七
撫順		九一五・七	六、八三九、八七〇
阿金溝		一〇・〇	五〇、〇〇〇
撫順線	甑兒屯	一・〇	一三、〇〇〇
	其他	八〇・〇	二〇、〇〇〇
計		一、〇〇六・七	六、九二二、八七〇
新邱		一、一一〇・〇	五〇、〇〇〇
北票		二〇・〇	三六〇、〇〇〇
京奉線	八道濠	七・〇	六〇、〇〇〇
	其他	六〇・〇	
計		一、一九七・〇	四七〇、〇〇〇
火石嶺		二・〇	一〇二、〇〇〇
蛟河		二・〇	二、〇〇〇
吉長吉敦線	老頭溝	一五・〇	二五、〇〇〇
	其他	六〇・〇	一五、〇〇〇
計		七九・〇	一四四、〇〇〇
密山		五・〇	一六九、三〇〇
稜		四〇・〇	一六〇、〇〇〇
北滿東支線 札來諾兒		二〇〇・〇	七八、七〇〇
鶴立崗		二〇・〇	

月四年四十正大（號四第卷五第報時查調鐵滿）響影すぼ及に炭順撫が營經の礦炭稜穆
月八年四十正大（號八第卷五第報時查調鐵滿）題問礦炭稜穆とーキスルデキス

其他	一〇〇・〇	六〇、〇〇〇	
計	三六五・〇	四六八、〇〇〇	
合計	二、九六三・九	八、九七一、五九七	

滿蒙の總出炭量は日本の約三分の一に當り、撫順炭坑は實に此の七八％以上を占む。又滿蒙の總推定埋藏量三十億萬噸は我國の經濟的可能採掘、埋藏量に近い。而も其出炭量に於て我國の三分の一なる事は卽ち其生命の三倍ある事を報ずるものにして隣接の地に此資源あるは吾人の以つて意を强するに足るものである。

一七　撫順炭——油母頁岩工業

滿鐵經營の撫順炭礦は鑛區面積一、八二〇萬坪東西四里、南北一里炭層平均百三十尺（最厚四百二十尺）埋藏量九億萬噸あり。運炭、選炭、注砂、通氣、排水、燈火の各設備に最新式の施設をなし經營、出炭量、埋藏量に於て名實共に滿蒙第一の炭礦たるに恥ぢず、發電工場、硫酸工場、石炭乾餾工場を附屬し一日平均就業人員、四萬四千八百五十名、滿鐵の投資八千三百萬圓政府出資財産を加ふれば一億二千九百萬圓に達し營業收入七千六百萬圓、支出七千萬圓である。

露天堀二、坑內堀九外に搭連坑、煙臺支礦を附屬せしめて居る。

一日平均出炭高撫順は昭和二年度二萬一千三百噸にして各炭坑年出炭高次の如くである。（英噸）

	撫順	搭連	煙臺	合計
大正十二年	四、八三、〇〇〇	七、一〇〇	九八、〇〇〇	五、〇五二、一〇〇
同　十三年	五、三〇四、三〇〇	八七、七〇〇	一〇四、二〇〇	五、六九六、三〇〇
同　十四年	五、六八二、六八〇	七〇、一九二	二七、七〇〇	五、八八九、五七二
同　十五年	六、四一四、〇八〇	七三、四〇〇	二三六、八〇〇	六、六二四、二六〇
昭和二年	六、八三九、八七〇	六、九三〇	一四二、〇〇〇	七、〇八二、八〇〇

撫順炭の特徴は揮發分多く、灰分比較的少き長所があるが、水分の多きは一の缺點である。

撫順炭の販銷狀態を見るに次の如くである。

	大正十二年	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年
滿洲各地	二、七三五、四〇八	二、八九四、一九五	二、七九四、四八一	三、〇四四、五五九	三、三三五、八四〇
輸出 南洋	一、九九四、四七	二、三九、九三	二、三八、一七四	二、三六、一七四	一、八三、〇五〇
輸出 支那	三九七、一三七	六三五、三三五	九四三、三二八	一、一四一、三八一	一、〇九二、三二九
輸出 朝鮮	四一〇、二六	三五、二七五	三三〇、三四七	三五、九三一	四、一六、九六七
輸出 臺灣	二、二〇〇	一、六七〇六	九、九九四	七、八八四	三、六六三
輸出 日本	九二、九三三	一、一七〇、八七九	一、三九七、二四	一四四、六七九	一、六九四、六一九
輸出 其他	—	二〇	—	—	—
輸出 計	一、九四〇、〇一三	二、四一四、三三八	二、七八、六四九	三、一九八、一四九	三、四〇〇、六五八
船舶焚料	六八一、三五四	五九三、四四一	六三〇、一六三	六三三、二六六	七〇三、一二六
合計	五、三四六、七四四	五、九〇二、九七四	六、〇九八、二九二	六、八六五、九八四	七、四二九、六二四
合計に對する輸出割	三六・三％	四一・〇％	四四・〇％	四六・六％	四五・八％

卽ち地方消費と輸出炭とは相半してゐる。現在に於て三百五十萬噸以上の輸出力を有してゐる。

撫順炭礦に附加して述ぶべきは油母頁岩より採取する石油にして、炭層上部に厚さ約四百五十呎の油母頁岩層あり其埋藏量約五十億萬噸、而して全層中上部の三分の二は工業原料として用ふるに足り其平均收

撫順炭課稅問題（滿鐵調査報告第一號）昭和三年一月
撫順炭礦と炭送の者業制限（滿鐵調査報告第八號）昭和三年八月
撫順炭の販路（滿鐵調査報告第二十四號）大正十四年八月

油率は約六％である。撫順に於て油母頁岩の發見されしは明治四十二年の頃にして爾來其の利用法につき研究の結果撫順式乾餾法の完成を見た。依つて大正十五年九月、五十噸能力の實大爐一基及附屬裝置を建設、試驗の結果成績良好なりしを以て目下第一期計畫として一日四千噸乾餾工場の建設準備中にして我國の燃料問題解決に貢献し得るの日も遠からずと信ず。

右第一期計畫による一箇年生產豫想量は左の如くである。

重油約六萬九千八百噸、粗パラフイン約九千四百噸、硫安約一萬八千二百噸、骸炭約四千九百噸。

一八　滿蒙の工業生產

工業原料たる天產資源、就中豐富なる農產があり、動力たる石炭は潤澤であり、加ふるに供給に不足なき低廉な勞力があつて、工業地として相當有力なる企業の要件を具備して居るにも係らず、今日猶油房、製粉、柞蠶、製絲、釀造及び滿鐵經營の機械工業を除いては全く不振なるは一に資金難である。資金難の原因として擧げらるゝ處は、滿洲工業の基礎が確立せざる時財界の不況に際會せること、金融機關の滿洲工業に對する不信用と工業以外に好投資對象を有すること、擔保物處分の困難及び販賣組織の不完全等である。從つて現在、滿蒙は原料の供給地たるの域を出でない。

左に滿鐵沿線附屬地に於ける工業の現勢を見る。

	工場數	資本金	生產額
		資本金	生產額
大正十四年	九二一	三六七、五八六千円	二二五、一〇〇、四一四円
昭和元年	九九二	三五二、六八四	二三八、五二二、九一七
同　二年	一、〇四八	三四七、七八四	二四四、六五三、二九二

であり大連に於ける生產額は一億二百萬圓にして全生產額の四一％を占む。

更に滿鐵沿線附屬地工業を業種別に主なる者につき見るに左の如くである。

	昭和二年			昭和元年		
	工場數	資本金	生產額	工場數	資本金	生產額
		千円	千円		千円	千円
油房	一六七	二五、三九六	九〇、五二三	一五三	三〇、二九二	一二八、三三〇
製粉	九	一〇、一四〇	一〇、八七三	八	九、九七〇	八、二二六
綿糸紡	三	一〇、五〇〇	七、七四〇	三	一〇、〇〇〇	六、六七六
精米、玄米	毛	四、三五六	七、六六一	五一	五、一九五	五、九五一
製材	二八	二、〇四六	五、三二九	三	一、七七九	四、六二一
煙草	六	二、六二九	四、八三〇	四	一〇、五四〇	五、九四
セメント	一	一四、八〇〇	四、三〇六	一	一四、八〇〇	四、一四七
機器車輛	一九	一、五四一	二、七〇一	一九	一、〇三一	一、六四九
板硝子	一	三〇〇〇	二、一四四	一	三〇〇〇	一、七三五
煉瓦	五六	七、二三〇	一、九六七	四七	三、二五一	一、六八一
鞍山製鐵所	一	三七、五六六	五、七三三	一	三七、五六六	二、三三七
撫順炭坑附屬工業	一	二三、〇七三	七二、五六〇	一	二三、〇七三	五四、五二三

以上の諸工業の內現在に於ては油房業の外は其の生產品が國際的聲價を博するものが少い。試に製粉に

南滿洲工業情事(大正十五年一月)
滿鐵(第二十九)
滿南洲工業情事(昭和二年三月)
滿鐵(第二十四)
滿洲經濟統計(昭和三年三月)
滿鐵(調査課)
滿洲の米穀(大正十四年三月)
滿鐵(第三卷五號)
滿洲鱗寸界出入(昭和二年三月)
滿鐵(第二卷八號)
滿北に於ける社會寸鱗(昭和二年三月)
滿鐵(第二卷二號)
滿北洲に於ける製粉業の狀況(昭和七年一月)
滿鐵(第七卷二號)
滿洲油房及穀粉業に就て(昭和七年一月)
滿鐵(第七卷二號)

就て見るも常に年二百萬袋以上の輸入があり到底滿洲内の需要を滿すに足らず、こゝに油房業のみは主要工場數、四百四十七、昭和二年度輸出二百萬噸に達し參々たる滿洲工業界にあつて獨り氣を吐いて居る。我國農牧經營上大に期待せらる。

一九　總　括——滿蒙資源の輸出現勢

各種の資源の内之を總括するに、滿蒙に於て其現在又は將來に渉つて大なる供給力を有する者は大豆、石炭及鹽の三者である。

即ち最近三箇年間に於ける輸出數量左の如くである。

	大豆	鹽	石炭
大正十四年	二七、八二二、七八五石	三三七、六一三、七五九斤	三、五六四、一九二英噸
同　十五年	三〇、六六三、〇三五	三二四、六四〇、八三一	三、七三七、七〇一
昭和二年	三〇、一七八、二八〇	二六四、八二九、七五七	七、一二四、九七六

大豆は大連、營口、安東及浦鹽の輸出統計の合計にして豆粕は大豆に換元即豆粕一枚に要する大豆を四九・五斤とし又、大豆一噸を六石九斗六升とせり

鹽は關東州鹽輸移出額、石炭は南北滿洲の總輸出額なり。

此三者は滿洲特産の第一位に推すべきもので、他の農産及畜産は將來農業政策よろしきを得て指導奬勵に之れ努めるならば、土地廣く勞力豐富以て幾多の特産を生産し得べけんも然らずば其の他の資源と同樣滿蒙の富源として聲を大にして稱すべき程のもの何も無いといふ方至當であらう。

此處に於てか吾等は鐵道業者として貨物の根元を培養するの見地より、又隣國先進國の立場より支那を救けて滿蒙に於ける土地よりの各種資源の生産助長に力を注がなければならない。今や其農業に、牧畜に各種の産業に新政策を樹立しなければならない時になつて居る。徒に土人の生産に任せて之を輸送し賣買することに依つてのみ利益を享けてばかり居られないのである。かくすれば其の資源は涸渴し終るであらう。涸渴に至らずとも現在に於てさへ年の豐凶に依つて屢々吾等は防穀令に依つて穀物の省又は縣外への搬出を禁止せられて居るの現狀である。

次に滿蒙資源の最近三箇年間に於ける輸出高を見るに次の如くである。

	大正十四年	昭和元年	昭和二年
農産物	二八九、一二〇、九一二円	二三二、八〇〇、四九八円	二五九、八六二、五〇九円
工産物	二二〇、三八〇、二五八	二二五、四八八、〇九七	一九八、一五八、五二六
鑛産物	五八、九八五、六四一	六四、五八一、二三〇	六一、二二九、三四〇
畜産物	一二、四三五、三四五	一一、五五五、九〇九	一〇、二〇六、五五二
林産物	八、〇五七、〇二八	八、四四七、一六五	九、四八四、六四六
水産物	四、九八四、四二五	三、五一四、六六〇	三、九八七、二八五

備考　南滿三港、哈爾濱、瑷琿、琿春、龍井村、滿洲里、綏芬河の合計高を海關兩（大正十四年二・〇四圓、昭和元年一・五八圓、同二年一・四四圓）を圓に換算せり。

第三部　我國衣食住料問題と滿蒙の資源

一　我國食料の需給狀態——米

我國食糧品の主要なるものは米である。日本に於ける米の生産並に其の需給狀態を見るに、最近五箇年間に於て左の如きものがある。

	産額	輸移入額	輸移出額	消費額
大正十二年	六〇、六九三、八五一石	六、九二八、八五八石	二六五、九一一石	六七、三五六、七九八石
同　十三年	五五、四四四、〇八九	九、八〇三、八四四	五四四、三八三	六四、七〇二、五五〇
同　十四年	五七、一七〇、四一三	二、〇八一、八七九	一、六五七、四一七	六七、五九四、八七五
昭和元年	五九、七〇三、七八四	一〇、二八三、九六二	一、七六、四八六	六九、八一二、二六〇
同　二年	五五、五九二、八二〇	二三、三九五、四三二	九九五、三七四	六七、九九二、八八八
平均	五七、七一〇、九九一	一〇、四九八、五五五	七二七、九一四	六七、四九一、六七三

年産額平均五千七百七十二萬石に對して消費平均六千七百四十九萬石で其不足額九百七十七萬石である此の不足額は如何にして供給せられてゐるかを見るに、約一千五百萬石の生産能力ある朝鮮と、六百萬石の生産力を有する臺灣竝に其他諸外國から仰いで居る、自大正十一年至十五年の五箇年間平均輸移入高は

朝鮮米　四、三二〇、二〇一石

臺灣米　一、七四二、四六五石

人口食糧問題調査委員會資料
農林省第四次統計表（昭和三年十一月）

外國米　三、一〇六、一四六石

計　九、一六八、八一二石

の如くにして漸く供給を充してゐるの現狀よりすれば敢て不安なしとするも將來人口の増加に伴ふ消費量の増加に應ずるには或程度の反當收量の増加、耕地整理開墾等に依る一方、朝鮮臺灣の産出又増加すべきも今人口食糧問題調査委員會の資料に依れば昭和三十二年に於ては需給關係次の如く推算されて居る。

	昭和二年	昭和三十二年	昭和二年を一〇〇とする增加率
人口	六一、二七四千人	八八、九八二千人	一四五
米需要總量	七〇、八三三千石	一一一、二二八千石	一五七
生産高	六〇、五〇九	八四、九〇七	一四〇
朝鮮、臺灣よりの供給量	五、九九一	二五、二七〇	四二一
差引供給不足	四、三三三	一、〇五一	二四

右に依れば三十年後に於てはかへつて、現在よりは米の供給に關し樂觀し得べきが如きも、人口竝に我内地生産米の増加率果して今後三十年間に既往の如き増加を來すべきやは問題とすべき外に朝鮮臺灣の供給量が今日の四倍以上に達する事は大に疑問とすべきである。人口食糧調査委員會資料の臺灣朝鮮兩總督府の調査に生産面積を現狀のまゝとしての人口竝に生産増加の三十年後の需給は朝鮮に於ては約五十四萬石の不足、臺灣に於ては約八百六十八萬石の供給過剩を算出してゐるから、假に右の二倍と見る時は兩者の三十年後に於ける供給量は千五百萬石程度となる、然らば差引供給不足は約一千百萬石となり之を我殖民地以外の地より仰がねばならぬ。

滿洲產米は現在水陸兩稻にて百二十萬石にして地方消費に足らないが、開墾見込地百萬町歩（千五百萬石）に着眼せねばならぬ。三十年間に悉くの開田は困難なるべきも將來の助成策如何に依りては相當の期望をなし得べしと信ず。吾人は將來不足米の見込が前記の如く百萬石にせよ或は一千百萬石程度にせよ之を全部我勢力圏内より供給し得る事によつて我等の糧道に自信を有するものである。

二　麥類の需給關係

麥類は米に亞いで我國に於ける主要食糧品であるが、其需給の狀態を見るに最近五箇年に於ける生產高左の如くである。

	大麥	裸麥	小麥	合計
大正十三年	八〇五、七六六	五、三八九、〇二一	五、三六八、一五八	一九、〇八二、九一六
同　十四年	八、八二九、〇三九	七、七八七、七〇一	六、二三一、四四一	三三、七二九、一八一
昭和元年	八、五六八、八三三	七、四四〇、五〇六	五、八九七、二六〇	二二、九〇六、六二九
同　二年	七、五六九、一九五	七、三一三、九〇二	六、〇五九、三三五	二〇、九四二、四三二
同　三年	七、六〇五、六一六	七、二六〇、〇三五	六、三六九、一二四	二二、二〇〇、七五五
平均	八、二九六、九五	七、〇七九、六二五	五、九四七、〇六一	二二、一五六、三八二

大正十三年乃至昭和元年三箇年平均消費量は次の如くにして

消費額	生產額	差引不足
八、四九九、七四〇石	八、四九一、二二二石	八、五一八石

小麥及小麥粉の需給狀態に關する調査（滿洲國調査資料第五篇）大正十二年二月
滿洲及日本に於ける小麥及小麥粉に關する統計（滿鐵調査時報第四卷第二號）大正十三年二月

	麥	裸麥	小麥	合計
裸麥	六、九八四、七九七	六、九八六、〇六三	一、二六六	
小麥	一一、二七二、八一九	五、七六二、二八六	五、五一〇、五三三	

用途は大麥、裸麥は飯用飼料にて八六％以上を占め、小麥は製粉六七％、醬油及味噌二三％である。其需給狀態大麥、裸麥は殆ど自給自足なるも小麥に至りては約五百五十一萬石の供給不足即ち生產は消費量の半に滿さる狀態である。

年平均消費額約一千萬石に對し不足高五百萬石、朝鮮、臺灣へは却て移出超過にして之が缺乏を悉く外國產に俟つて居る、即ち四百乃至五百萬石の輸入超過である（麥粉は小麥粉に換算小麥の輸出入は頗る不同であるが前記三箇年を假に標準とした）

翻つて滿洲小麥には幾許量の供給力ありやと云ふに總生產一千萬石ながら現在は寧ろ小麥及麥粉の輸入超過であるから之より供給を望み難い。然し吾等は大正九年世界小麥の不作に乘じて、四十一萬四千七百一噸（二百四十八萬石）の輸出超過の事實を經驗して居る。小麥作の順調に進み又小麥が南滿より北滿に適作なる等に鑑みて、北滿開墾進行に伴ひ之に對し相當の期待を抱くは決して不當ではないと思ふ。

左に最近十箇年、五箇年每平均の滿洲小麥の輸出入表を揭ぐれば次の如くである。（麥粉を粒に換算）

	輸入	輸移出	出超
自大正七年至大正十一年平均	六一、八五七噸	一五一、〇一六噸	八九、一五九噸
自大正十二年至昭和二年平均	一〇四、九一二	三〇、三五四	七四、五五八
	日本向	歐洲向	合計
自大正七年至大正十一年平均	四三、五六七噸	一〇七、一四八噸	一五〇、七一五噸

自大正十二年至昭和二年	平均	二、一一四	二、一一四

滿洲小麥の輸出入は前後五箇年間に於ては全く反對の狀況を示して居る。

小麥は米と異つて、國際的食料品たる關係上、比較的供給を得易きと、世界小麥の產額は現在の處供給過剩の狀態であるが、地理的に日本と滿蒙とは相隣れる關係上より安價に供給せられ得る望みがあり將來我國米作の不足を勢ひ小麥に求むべきではないかと思ふ。此の意味に於て滿洲小麥の資源に關して吾人は最も注意を拂ふ所以である。

小麥粉を其の需給上より見るに、我國に於ては原料小麥使用高約七百五十萬石の內、內地產小麥七割に、外國產三割の狀態である。小麥粉の生產高約三千六百萬袋にして內地消費三千四百萬袋、粉としての輸移入をも見てゐる(尤も年に依つて輸移出超過の年もある)。

其の他小麥は醬油味噌釀造用に二百六十萬石、種子用として二十五萬石、菓子及飴三十六萬石、飼料十七萬石、雜消費三十萬石である。

小麥粉の點より見ても大體に於て輸移入超過であるから、小麥を輸入して粉として輸出するといふのでないから、我國小麥需給上其の資源を何れかより求めねばならないのである。

三　豆類の需給關係

米麥に亞いで重要なる我國食料品として豆類を擧げなければならない。豆類の用途としては主として次の如きものがある。

大豆は其七五%は味噌、醬油、一五%は製油原料、一〇%は豆腐とし其他納豆、菓子、煮豆、豆粉、綠肥用、家畜飼料、化學工業原料等であり。

小豆は其九〇%迄は餡とし、飯に混用、菓子、小豆粉にせられ、菜豆、豌豆は飯に混用し副食物とし飴、味噌、醬油、罐詰にする等である。

是等各種豆類の生產額を見るに次の如きものがある。

	大豆	小豆	豌豆	蠶豆
大正十二年	三、四四三、九〇八石	八八八、六九四石	四四〇、〇五九石	五〇八、四四四石
同　十三年	三、二四二、〇九九	九〇〇、三三七	三七三、四五八	五七七、八一三
同　十四年	三、八〇八、八四四	一、〇六二、二五四	三三八、一六九	四八五、八三七
昭和元年	二、九九八、六〇六	六七五、七九七	三八一、四六九	四九〇、二三〇
同　二年	三、二六三、一六六	八七七、一六四	四五〇、三〇五	四八四、三二一
平均	三、三〇九、三二七	八八〇、六三九	三九六、六九二	五〇九、三二三

大豆は產額三百三十萬石で、內地消費は七百八十萬石にして四百五十萬石の不足を生じ居り、小豆は八十八萬石の生產に對し消費は百三十萬石で約四十萬石を不足し、豌豆は四十萬石の生產に對し十七萬石の消費にて二十三萬石內外の供給過剩を見て居る。蠶豆は五十萬石の生產に對し需給殆ど過不足なきものゝ如くである。此の大小豆の供給不足に對し、從來何處より之を仰いで居たかを統計に見るに、輸移入高の半は關東州を仕出地として居る滿洲品であり、朝鮮品が之に亞いでゐる。豆類の內大豆の輸入に就て見るに次の如くである。

大豆の輸入

	支那	關東州	露領亞細亞	其他諸國	合計
大正十二年	四三、三九石	一、九九九、三四石	一九、一〇六石	一石	二、〇〇一、六七一石
同十三年	四二六、一八四	二、八六八、九〇七	二〇〇、〇〇一	—	三、〇〇五、〇九三
同十四年	五二三、四〇六	二、六二二、二九三	二〇九、六九九	二七七	三、三三六、六六六
昭和元年	八四七、六五五	一、六三六、九五五	七九、三八五	三七七	三、三三四、七四四
同二年	九九五、八一八	一、六三九、六六九	四五九、一九五	—	三、〇八五、四一六

大豆の移入

	朝鮮	臺灣	合計
大正十二年	一、一六八、二七〇石	五、一八五石	一、一七三、四五五石
同十三年	一、三八八、六八七	四、二五〇	一、三九二、九三七
同十四年	九八六、三八五	四、五三九	九九〇、九二四
昭和元年	一、三九三、六三八	五、五〇六	一、三九九、一四四
同二年	一、四四〇、五二五	五、七二一	一、四四六、七七八
平均	一、二九五、五〇一	五、〇四〇	一、三〇〇、六四七

即ち日本に於ける大豆の總消費七百八十一萬石に對する國内供給不足高は其半額に達し之は輸入及移入によつて補はれてゐるのである。

小豆も同様其不足分の供給を九割は支那及滿洲に受け、殘りを朝鮮に仰いで居る。

外國貿易統計表年(大藏省)昭和二年七月
朝鮮貿易年表(朝鮮總督府)昭和三年九月
臺灣貿易年表(臺灣總督府關稅局)昭和三年十二月

滿蒙に於ける大豆、小豆は既に前項に記した通り、我國の供給國として充分なる期待を之に置くことが出來ると思ふ。

更に之を大豆粕に就て見るも、我國生產高は最近五箇年間(大正十二年乃至昭和二年)に於て二十萬噸乃至二十七萬噸であり、之が消費百四十三萬噸乃至百五十七萬噸に達し其供給不足は殆ど之を、全部滿洲に仰いで居る。即ち左表の如くである。

大豆粕

	輸入	移入(朝鮮)
大正十二年	一、四一一、三五〇噸	八六、一一三噸
同十三年	一、二三二、四五三	四〇、四六六
同十四年	一、一一三、六〇九	一〇七、三二五
昭和元年	一、三九〇、二一〇	五〇七、七二〇
同二年	一、三〇七、一八六	二二、〇九二
平均	一、二九〇、九六一	一五二、七四三

滿洲に於ける油房數は四四七、一日生產能力、豆粕、五十五萬六千六百八十七枚(一六、八六九噸)、豆油、二百七十八萬三千四百三十五斤を有し、昭和二年度に於ては七千三百萬枚即ち二百二十一萬噸に達した。

豆粕の日本に於ける、需要は近年肥料としては硫安に壓迫せられ其販路の上に減退を示しつゝはあるが猶有用なる肥料としての地位を俄に失はず更に家畜飼料として又醬油釀造原料として新販路を開拓しつゝ

外國貿易概覽(大藏省主税局)昭和三年十二月

あれば我國の食糧問題上直接間接に貢献しつゝあり。其資源の滿洲に對する期待も大なるものがあるべきである。

四　滿洲粟の朝鮮輸出

朝鮮殊に北鮮地方農民は、農作の不良なると共に、高價なる米を販賣輸移出して之に代ふるに滿洲粟を輸入して食糧とするの傾向を生じ來り、近年其輸入の上に著しい增加を見てゐる。此結果日本內地への米穀の供給增加を來し我國食糧問題上滿洲粟は重大なる任務を有するに至つたのである。昭和二年度に於ては全滿輸出粟は六、五五三、一二〇擔、三一、三九七、九七八海關兩、內朝鮮向輸出は五、七二一、一六一擔、二八、六〇三、〇三五海關兩にして總額の數量に於て八七・三%、價格に於て九一・一%を占めて居る。而して朝鮮輸出の大部分が安東經由である。

猶滿洲粟の朝鮮輸入に就いて朝鮮貿易年表により最近五箇年の趨勢を見るに次の如く甚だしき增加を示して居る。

	數量	金額
大正十二年	二、六〇九、九六六擔	一三、三一三、六八八円
同十三年	三、二六二、一〇〇	一九、六六五、八六〇
同十四年	四、〇四九、四四五	二八、七六五、六三五
昭和元年	五、二四二、九三九	三一、八〇二、三八六
同二年	六、〇七一、三五八	三一、六四九、三七三

粟が滿洲農產物中產額に於て第三位を占め二千五百四十萬石に達し、豐富なる資源をなしつゝあることは前項說べた處である。

五　肉類需給と滿蒙牛

我國に於ける肉類の消費量は最近農林省畜產局調査に依るに一人一箇年六五八匁で英國の一五貫七八〇匁、米國の一九貫七八八匁に比べると遙かに僅少であるが近年其需要は益々增加の傾向を示しつゝある。

最近數年間に於ける其屠殺頭數を見るも

	成牛	犢	馬	豚
大正十二年	三一〇、八六四	二六、三〇〇	七三、八二一	三八、六二三
同十三年	三一八、三三〇	二五、九二〇	七七、四四五	五八、九六七
同十四年	二五五、九一一	三三、三九九	七七、〇二一	七六、一八七
同十五年	二七九、四〇五	三三、四四五	七四、一五四	五九七、二六四
昭和二年	二八三、七二三	三三、七四一	六九、八三一	五六二、三六六

昭和二年に於ける其價格成牛及犢にて五千百五十三萬五千三百二十八圓、馬は五百七十八萬五千七百八圓、豚の二千百四十六萬七千三百六十三圓、合計七千八百七十八萬八千三百九十九圓に達して居る。

牛肉のみに就て見るに大正元年には二十三萬五千頭內外であつたが大正十三年には最高三十一萬八千五百三十頭に達せしも昭和二年には二十八萬二千七百十二頭に減じ大正十三年の最高屠殺數より三萬五千八百十八頭の減少を來して居る、之れ主として屠肉の輸移入數量增加せる爲めである。今大正九年以降昭和二年に至る輸移入別數量を見るに

	輸入數量			移入數量		
	生牛	屠肉		生牛	屠肉	
大正十二年	四〇	三、八六二、八〇〇		四七、五四九	五四、六二八	
同十三年	三〇四	二七、四八六、九〇〇		六〇、一四〇	一、七九五、七九三	
同十四年	一、四三八	一九、六五五、四〇〇		四七、九四三	二、三三二、四八八	
同十五年	一六一	三〇、三五六、三〇〇		四七、九二一	六六八、八五一	
昭和二年	三七	三〇、九九一、七〇〇		四一、〇六四	四〇二、〇〇九	

我國に於ける輸移出入數量は消費量の増加と冷藏裝置の發達に依り著しく増加の傾向を示す。我國牛肉の需要は一箇年約四十萬頭内外で其内約四割内外が海外から輸移入さるゝ現狀にある。

其供給狀態は次の如くである。

山東牛	六〇、〇〇〇頭内外
朝鮮牛	五五、〇〇〇同
濠洲牛	八、〇〇〇同
加奈陀牛	五、〇〇〇同
滿蒙牛	九、〇〇〇同
計	一三七、〇〇〇同

山東及朝鮮は我國牛肉供給地として最も重要の地位を占めて居る。

一方日本内地の產牛は其數の増加は少く、日本の消費に對し内地牛のみでは、到底間に合はぬ狀態である。日本に於ける牛、馬、豚の數は左の如くである。

	牛	馬	豚
大正十二年	一、四六九、三二九	一、五九一、五九一	六六七、八二〇
同十三年	一、四五六、二四三	一、五六八、六八五	七四三、二八三
同十四年	一、四五九、六五三	一、五五三、三〇八	六七二、五八三
同十五年	一、四六五、一四九	一、四八六、四五三	六二一、四六六
昭和二年	一、四七四、四〇九	一、四九四、八二三	六七七、〇六三

之に對して滿蒙は如何なる狀態にあるかを見るに昭和二年南滿三港から輸出した日本向家畜の輸出は一頭もないが牛肉として輸出せられたるものは一七二七五擔(一三、一一〇頭)價格十九萬三千九百六十四海關兩に達し將來激増の傾向を有す。最近調査の結果によると搬出の方法と冷藏輸送の方法との完備を計るならば其數量に於て相當期待すべきものがある。

現在滿蒙に於ける牛、豚は前頃既に說いた通り充分豐富なるものとは云ひ得ないが其品質の改良と共に輸送機關の充實を計るに於ては我國の肉供給資源として多少の價値あるものと思はる。

六　鹽の需給狀態

我國に於ける鹽の生產は最近五箇年左の如くである。

	生產高	人口一人當生產
大正十二年	七九九、八四六、三二五斤	一三・二斤

大正十三年	一、〇六一、九四九、九四四		一七・三
同　十四年	一、一一四、四一一、五六八		一七・九
昭和元年	一、〇二三、五五六、三一一		一六・二
同　二年	一、〇三一、八九七、八一五		一六・一

其消費量は外國に於ては十五、六斤なるも、日本人は約二十斤内外であるから、生産のみを以つては不足である。其需給關係は大體左の如くである。

	生産高	輸移入高	需要高
日本	十億萬斤	五億萬斤	十五億萬斤
朝鮮	一億七千萬斤	二億三千萬斤	四億萬斤
臺灣	二億五千萬斤	—	九千萬斤
關東州	四億萬斤	—	二千萬斤

我國不足鹽五億萬斤の供給は、臺灣鹽一億五千萬斤、關東州鹽二億五千萬斤其他諸外國鹽一億萬斤である。大正十二年以前は青島鹽の供給二億萬斤以上ありしも輸入杜絶の結果は著しく關東州鹽の供給力を增加し來り供給力又前項說けるが如く大なる者あるを以つて我國鹽需給上重要なる地位を占むるに至つた。然も十數年後には我國の需要は二十億萬斤に達すべく之に反し生産は現狀以上に增加する事は困難なる事情にあり、十億の不足を輸移入に俟たねばならぬであらう。此點州鹽に對して意を强くするに足る者がある。

七　建築材の需給と滿洲材

我國に於ける林産物の總需給量は、嘗て帝國森林會の調査に依れば三億七千萬石にして需給關係に不足なきも、之れ用材及燃材の總計にして、用材は却つて供給不足である即ち平均需要量七千萬石に對し生産は左の如くである。

大正十四年	四二、八六九、二六九石	
昭和元年	四五、四五〇、四八〇	
同　二年	四六、七二三、八四七	

即ち不足額二千四百萬石の補充は樺太より一千萬石、朝鮮臺灣より三十萬石、外國材一千二百萬石である。外國材の八割五分は米材、カナダ材であり西伯利亞材は約一割を占む。

最近に於ける輸入量左の如くである。

	數量	數量
大正十二年	八、〇二二、七三〇石	八〇、六一八、一二三円
同　十三年	一一、三三一、六〇八	一一九、七九九、五一四
同　十四年	七、五六四、六二一	六九、九四〇、六八八
昭和元年	一一、六四一、四八五	九五、八一七、九四二
同　二年	一二、五三八、四六二	九五、九一五、六二七

猶木材仕出國別に見るに次の如くである。

第四次農林省統計(昭和三年一月)
我國に於ける木材の需給と滿洲材(滿鐵調査資料第二十四篇)大正十二年二月
現代産業叢書第一卷(園部一郎、林業)昭和三年十月

仕出地	昭和二年	昭和元年
支那	一、三九九千円	一、六四五千円
關東州	二五二	二四八
露領亞細亞	一五、〇〇七	九、五六六
暹羅	一、五五三	一、四七八
北米合衆國	七一、二八九	八四、七〇八
加奈陀	一二、一三六	四、一二二
其他	二、一三五	二、二五五
計	一〇三、七七三	一〇四、〇二六

我國の立木蓄積量は臺灣、朝鮮、樺太を加へて約百一億六千三百十七萬石と稱せられ、約滿洲の二倍に上るが、其需要の多き、勢ひ伐採高を增し現在の如き伐採を續けるならば四、五十年の需要を充すのみなりといふ。之れ其供給を輸入に仰がなければならぬ點で、供給國としての滿洲の能力は果して如何、現狀を以てすれば年伐採量は四百萬乃至五百萬石で多くは北支那、滿洲、朝鮮の需要に充てられ、日本向は前記の通り極少量に過ぎない、且つ立木蓄積材量五十億萬石に對して年伐採五百萬石足らずは、更に少量なりとはいへ、交通の不便は之が搬出に一年乃至一年半を要する等、將來森林鐵道の敷設せらるゝ等のことなくんば、我國は滿洲材に對して多くを期待することを得ないであらう。然し吉會鐵道の完成は我國に吉林材供給上有利となるであらう。沿海州材又滿洲材と趣を同じくして居る點より、現在に於ては最も豐富で交通の便宜多き北米合衆國又はカナダ方面に依賴するの外はない。

昭和二年外國貿易概觀（大藏省主税局）昭和三年十二月

將來の問題としては吾等は滿洲及西比利の林業助長策を講じ、或は投資に、勞力の供給に、伐採地よりの木材浮送を完全ならしむる施設に、河川沿岸より鐵道への輕便鐵道等の開設鐵道運賃の引下げ等に依つて、豐富なる極東森林資源の開發を行つて、始めて我國に對する關係を一變せしめ得るであらう。

八　衣服料の需給狀態——棉花と羊毛

衣服料中最も廣く又多く用ゐらるゝ綿製品たるべき原料棉花に就て內地の狀態を見るに、我國に於ける栽培は年々減少の傾向にあり、明治三十年に四萬四千四百町歩ありしものが、同四十年には七千三百町歩になり、大正十年には更に二千三百町歩に減じ昭和二年には一千百四十二町歩。從つて其產額に於ても、明治三十年に實棉七百三十萬貫が、同四十年には百四十二萬貫、大正十年には五十九萬貫、昭和二年二十五萬貫になつて居る。

最近三箇年間產額は左の如くである。

大正十四年	一、六六八町	三六〇、九三九貫
昭和元年	一、三一六	二五九、六三五
同二年	一、一四二	二五四、四一一

一方其消費を見るに紡績業は我國に最も發達したる工業の一にして其發達程度は世界の驚異となつて居る。昭和二年末會社數六四、工場數二五七、錘數六百十一萬錘にして世界第七位ではあるが其棉花の消費量に於ては世界第一の英國と相伯仲し昭和元年下半期の如きは一時之を凌駕した程である。昭和二年度英國は三、〇一〇千俵、一錘當二六・五封度に對し日本は二、八五一千俵、一錘當二二・九封度を消費してゐ

る。世界消費量の一割以上である。近年我國に於ける棉作が思はしからず棉花の自給を說く者も出で朝鮮に於てやゝ有望にして十五萬町歩、約三十萬俵の生產があるが此大消費に應ずべくも無く需要額の五%に過ぎず。從つて我國綿絲紡績業は殆ど外國產原料に依存して居る。輸入總額竝に主要仕出國の數量を揭ぐれば次の如くである。

仕出地	昭和二年 數量	昭和二年 價格	昭和元年 數量	昭和元年 價格
支那	一〇四、八一二、一六二 擔	四九、二五九 千円	八六九、二五五 擔	四五、一三三 千円
英領印度	四九五、七〇〇、五五	二〇三、二八一	五八六、五二、二八三	三一五、五三〇
北米合衆國	六三五、八六五、八	三四三、五六三	四、五三、三七三	三一七、四二七
埃及	二三八、三八二	三一、七九八	二五五、六四七	二八、六八三
總計	三、七九八、八五五	六三四、六三〇	二、六四五、六九三	七三五、九三〇

然らば棉花の供給に關して滿洲の地位如何、最近遼陽に滿洲紡績、金州に內外棉花、奉天に南滿洲紡織、奉天紡紗廠、鐵嶺に滿洲織布、福島紡績等が將に操業せんとし、滿洲に於ける棉作熱も勃興し來つたとはいへ、到底現在に於ては我國に對して貢獻し難いであらう。然し將來に於て棉作地として滿鐵農務課に於て調査せる處によれば、奉天省中生產地と見做し得べきは、現在大豆作地たる三十五萬町歩の內半、十七萬町歩であらうと。從つて滿洲に於ける棉花作付面積を約二十萬町歩と假定すれば、約三十三萬俵の生產を得。之も在滿紡績會社の原料として使用せらるゝ以上を出難いであらう。

羊毛に就いても、前述の通り滿蒙品は品質粗惡で、毛織物として特殊のもの又は混ぜ物の外は使用し難く、毛織物として多くの種類の需要、比較的少い我國に於ては、遠く毛質改良後の將來を待たなければならないのであらう。

我國の緬羊飼育及羊毛產出又不振にして國內需要に對しては全く無力、昭和二年總頭數一萬八千八百十四頭に過ぎず之を全部海外に仰いで居る。

試に羊毛輸入の趨勢を見るに次の如くである。

仕出地	昭和二年 數量	昭和二年 價格	昭和元年 數量	昭和元年 價格
支那	六七四、九擔	四三、三 千円	八九〇、八擔	六六 千円
關東州	二八二	一七	三二	四
英吉利	一七、四四九	四四、八七	三二、六三三	九、三三
亞弗利加	七六四〇	八二	一、六九八	一六三
濠太剌利	七四四、〇五一	九四、六〇一	五五二、五五五	七四、一五一
其他諸國	三、八七七	一、二九四	一、八一五九	一、七〇五
總計	大、九〇四八	一〇一、六六六	六二、〇一五	八六、〇二四

輸入數量も逐年增加の傾向を示し、總數量の九割以上は濠洲產毛である。

內地羊毛產出に就ても、我政府は每年百萬圓を支出して緬羊飼育の奬勵をなし大正十年より向ふ二十五箇年間に百萬頭に達せしめんとの計畫を有してゐるが、本計畫完成後と雖、軍服、警官服の需要を滿し得るのみであるといふ。此間にあつて滿蒙の羊毛は、如何に我國に供給せらるゝかといふに、支那羊毛と共に

地理的に便宜なる地位にあるに係らず、其の品質劣等は一大障害をなして居る。從つて我國に於ける雜種羊毛消化の技術的進歩をはかると同時に、滿蒙羊毛改良に成功を期せねばならないのである。此處に滿鐵が緬羊の改良に多額の犧牲を拂つて居る所以があるのであつて、其成功も將來に期せねばならない。

棉花にしても羊毛にしても、現在に於ては滿蒙より日本としては多くを期待することを得ないのである。

九　我燃料問題と滿蒙

我國の如き燃料資源の乏しい國では人口が都市に集中し、工業の發達が盛になればなる程燃料問題が喚起される。試に三萬噸の船を造るには二萬噸の鋼材を要し、二萬噸の鋼材を造るには八萬噸の石炭を必要とするが如き又、自動車一臺の年所要石油は六石乃至十石といふ從つて我國自動車總數三萬五千臺として之を運轉するに二十一萬石の石油を要し之のみにて我生産油の一三%に當るが如き、其他電燈、瓦斯、汽車汽船の燃料の如き之に應ずべき我國資源如何。吾國の石炭存在量は約八十億萬噸と稱せられるが經濟的採掘は今日の如き情態を以て採掘するものとすれば、三十年乃至六十年にて終ると稱せらる。即ち二十億乃至三十億萬噸以上は採掘し難いことになる。

左に石炭の産出輸出入高を示せば次の如くである。

	生産高	輸入高	輸出高
大正十二年	二八、九四八、八二〇 佛噸	一、七一二、八五一 佛噸	一、五八六、八九九 佛噸
同　十三年	三〇、一一〇、八二六	二、〇一一、六五八	一、七二四、九八二
同　十四年	三一、四五九、四一五	一、七六八、三四八	二、六九八、一〇七
昭和元年	三一、四二六、五九四	二、〇四四、七二六	二、六一一、〇三九
同　二年	三三、三六九、〇〇〇	二、六六〇、五五六	二、一七三、九四九

約年三千五百萬噸を消費しつゝありて、此の消費の增加は吾國に於て必然的で現在に於ては過不足なきが如きも其供給不足を訴ふるは近き將來であらう。然るに朝鮮の石炭は言ふに足らざるべく、臺灣は採掘可能炭四億萬噸と稱せられるも、現在百二十五萬噸の出炭を見つゝあれど、臺灣自身の消費に充てられる外輸出用として望み少く、將來の採掘能力又著しき進歩を望み難く、所詮米國の五百分の一、英本國の三十分の一支那の百分の一しか埋藏量なき我國の石炭は饑饉に陷らざるを得ないであらう。

此點に於て滿洲炭、殊に撫順炭は、前項說けるが如く豐富なる供給力を有し、山東炭と共に將に日本の石炭問題に貢獻する處あらむとするのである。

石油に至つては現在より以上の産出は困難なるべく、益々輸入に依賴しなければならない、試みに最近五箇年間に於ける生産消費を見るに次の如くである。

石油需給統計　（單位函一函は十ガロン約二斗）

	大正十二年	大正十三年	大正十四年	昭和元年	昭和二年
國産	六、一三三、〇三〇	六〇、六八五	六〇四、八四五	六、三三六、六七	六五、八三二
外油精製	三、七〇五、八三〇	四四、一七三、九九	五七、〇五一、五二一	六、五六四、二三三	六、九六六、二四六
輸入	七四三、一三三	九、四九五、九七一	九、六三〇、二六九	二、一〇八、五〇四	一五、三〇〇、四四三

輸出	七六、一四三	九六、一四〇	二二〇、八七一	一六四、五三五
移出入	三七五、四〇三	四六四、七七	七八〇、二〇八	九〇四、一七四
合計	一五、八五二、三七六	一九、三六九、二八	二〇、五三七、五八六	二七、六六六、三二〇

（臺灣、朝鮮及海軍輸入除外す）

の如くにして、石油の缺乏は我國産業軍事上の一大缺陥である。

之れ又本社が撫順の油母頁岩油採掘を計畫せる所以であつて將來の事に屬すべきも、我國産業上の一大缺陥を補はんとするにある。石炭、石油の需給上より見て我國燃料問題に對し貢献する處のものは、確に我滿洲であることを信ずるのである。

一〇 總括——滿蒙資源の日本向輸出現勢

衣食住料の内、我國は何を最も要求せるかを簡單ながら明にしたと思ふ。これに對して、滿洲は何の部分を貢献し得るかを考察して來たのであるが、要するに、食料品及食料生産上に滿洲の大豆、豆粕は偉大なる期待を繼ぎ得べく、小麥、肉類は其將來を囑すべく、鹽は食用及工業用に現に我國に貢献する處多く、將來益々之に望み多かるべく、木材及棉花、羊毛の期待に副はざるものあるに反し、燃料としての撫順炭は我國に産業的發展の前途に光明を與ふるものと言はねばならぬ。更に石油の産出は、將來益々我國燃料問題解決の鍵たるべきである。

最後に現在我國に於て滿蒙資源を幾許所要して居るかを明にする爲に、南北滿洲の日本向輸出額の統計を掲げて本稿を結ぶ。

	大正十四年	昭和元年	昭和二年	昭和二年度滿洲總輸出額に對し	昭和二年度日本總輸入額に對し
農産物	六〇、九一五、九四六円	三七、二一〇、五七三円	三三、〇三五、七九円	一三・〇%	三・九%
工産物	一五一、一四六、三七三	一五四、九一六、〇七八	一三九、七四、三四四	七〇・五	二五・一
鑛産物	一七、〇四五、九二四	三三、九六、三〇二	三三、〇四七、六四四	五二・五	一三・九
畜産物	二、八二四、七	二、〇四七、九四四	一、八五八、四八一	一・八二	一・四四
水産物	一、六四〇、〇六〇	一、一〇六、七九九	八二〇、九四四	二〇・六	二三・二
林産物	一二三、四八	九三、三二九	五一、六六一	〇・五	〇・一

更に之が品種別につき見るに次の如くである。

昭和二年度重要品南北滿洲輸移出額

	全滿總輸移出額	同上百分率	日本向輸出の同上に對する百分率	朝鮮向輸出の同上に對する百分率
大豆	九八、〇六八、一七〇 噸	二五・六二	一五・〇〇	〇・五八
豆粕	八四、九五八、八二四	二二・二〇	四四・四五	六・三二
石炭	三五、二六五、七〇八	九・二一	四五・〇五	九・七五
豆油	三三、九二八、七三九	八・六〇	〇・〇三	〇・〇三
粟	三一、三九七、九七八	八・二〇	二・〇五	九〇・七六
高粱	一八、八二四、九三七	四・九二	三・〇三	一・五四
其他穀物	一八、七八八、〇三四	四・八九	三・七九	四・五一
鐵及同製品	六、一五〇、三九九	一・六一	八四・九一	五・九五
木材及竹等	六、一二二、七三七	一・六〇	〇・五八	六九・九二

關東州特惠關稅改正（滿鐵調査時報第四卷第九號）昭和四年三月、（滿鐵調査時報第七卷第三號）昭和四年二月
安東陸境減稅撤廢問題（滿鐵調査時報第九卷第三號）昭和四年三月

其他	五〇、三五〇、三五〇	一三・一五	
總計	三八、三五五、八一六	一〇〇・〇〇	
備考（瑷琿、琿春龍井村輸出を除く）			四〇・六〇

又之を滿洲よりの仕向國別に見るに左の如くである。

昭和二年度全滿洲輸出國別表

仕向國	輸出額	同上百分率
日本	一五五、四二六、二九五（海關兩）	三八・〇九
支那	一一三、九〇六、四七三	二七・九三
露西亞	六六、九九八、二六七	一六・四二
北米合衆國	一〇、三三八、三八一	二・五三
和蘭	一六、四三五、三三二	四・〇二
英吉利	一二、八六三、九五五	三・一五
其他諸國	三二、〇六七、四七六	七・八六
計	四〇八、〇三六、一七九	一〇〇・〇〇

即ち滿洲總輸出額の三八%を日本國が需要し、大豆、豆粕及石炭の半數は日本向にして鐵類は九割以上が日本向になつてゐる。

翻つて日本が各國より輸入する金額上より見る時は、鑛產物及水產物の何れも二割以上の外案外小額である。之は一に滿洲より輸入するものが金額の貴からざる品種を含むとはいへまだ〳〵滿蒙より供給を期待し得べきであるまいか。

昭和四年五月三日印刷
昭和四年五月五日發行

南滿洲鐵道株式會社庶務部調査課
編輯兼發行人　佐田弘治郎
大連市東公園町二十一番地
印刷人　吾妻力松
大連市東公園町二十一番地
印刷所　滿洲日報社印刷所

發行所　南滿洲鐵道株式會社

終